

臨床化学検査部門

森部 龍一（愛知医科大学病院）
 窄中 美帆（J A 愛知厚生連 豊田厚生病院）

I. はじめに

本調査は臨床化学部門の施設間差是正を目的としている。

II. 対象項目

グルコース、総ビリルビン、直接ビリルビン、ナトリウム、カリウム、クロール、カルシウム、無機リン、血清鉄、マグネシウム、総蛋白、アルブミン、尿素窒素、クレアチニン、尿酸、総コレステロール、中性脂肪、HDL-コレステロール、LDL-コレステロール、AST、ALT、ALP、CK、LD、 γ -GT、AMY、ChE、CRP、ヘモグロビンA1cの29項目を対象とした。

対象項目のうち、直接ビリルビンは、試薬メーカー間差が認められたため、評価対象外とし、SDI評価のみとした。

III. 試料について

試料は、全項目測定用としてプール血清2濃度（試料11、12）、ヘモグロビンA1c測定用として管理血球2濃度（試料13、14）を用いた。

IV. 参加施設数について

臨床化学検査部門の参加施設数は130施設、その内、ドライケミストリー法を採用している施設数は18施設であった。

V. 評価基準

1. SDI評価

SDI評価は他施設との相対的評価を示す指標であり、測定方法分類毎に実施した。SDIは、各施設測定値の極端値を除去後、 $\pm 3SD$ 切断法を2回実施し、平均値、SD、CV（%）等の基本統計量より算出した。SDI評価は、バラツキの大きさにかかわらず一定の割合で3SDを超える施設が存在し、“A”・“B”・“C”・“D”評価と必ずしも一致しない。

2. “A”・“B”・“C”・“D”評価

“A”・“B”・“C”・“D”評価は目標値 $\pm$ 評価幅で評価を行った。“A”評価の評価幅は、日本臨床化学会で定められた正確さの施設間許容誤差限界（ B_A ）とした。“B”・“C”・“D”評価の評価幅は、臨床検査精度管理調査の定量検査評価法と試料に関する日臨技指針を参考に、調査試料における各項目の濃度、および技術水準を考慮した

うえで設定した。

1) 目標値

目標値は、県内7つの基幹施設の協力のもと設定した。標準物質が存在する項目は、測定値の正確性を確認したうえで統計処理を行った。

総ビリルビン、HDL-コレステロール、LDL-コレステロール、ヘモグロビンA1cは、方法・試薬・機種などにより異なる反応性を示したため、全参加施設の測定値から外れ値を除去した平均値を目標値とした。

目標値となる平均値は、測定報告桁数より1桁多く求めた値で算出し、許容幅の下限値は切り下げ、上限値は切り上げにより報告桁数と一致させた。また、クレアチニン、尿素窒素、CRPは、日常多用されている桁数に合わせて処理を行った。

試薬、機器メーカーによって反応性が異なった場合は、対象を別評価区分とした。

ドライケミストリー法の目標値はウェット法と同じ値とし、ウェット法で方法別または試薬別評価となった項目に関しては、ドライケミストリー法での平均値を目標値とした。

2) 評価区分

評価区分の設定は、精度管理試料の反応性を確認するため、各施設からの報告値を用いて方法別・試薬別・機種別等に分類したヒストグラムを作成し、問題の有無を確認した後に設定した。評価区分のn数が5施設未満の場合は“評価対象外”とした（表1）。

表1：評価区分

項目	評価区分
Glu	項目一括
TB	方法別
DB	SDI 評価のみ
Na	項目一括
K	項目一括
Cl	項目一括
Ca	項目一括
IP	項目一括
Fe	項目一括
Mg	項目一括
TP	項目一括
ALB	項目一括
UN	項目一括
Cre	項目一括
UA	項目一括
TC	項目一括
TG	項目一括 ※1
HDLC	試薬別
LDLC	試薬別
AST	項目一括 ※2
ALT	項目一括 ※2
ALP	項目一括 ※2
CK	項目一括 ※2
LD	項目一括 ※2
GGT	項目一括 ※2
AMY	項目一括 ※2
ChE	項目一括 ※2
CRP	項目一括
HbA1c	方法別

※1:JSCC/ReCCS 基準以外は評価対象外

※2:JSCC 標準化対応法以外は評価対象外

3) 許容幅

ウェット法において、“A”評価の評価幅は、生理的変動をもとに算出した施設間の許容誤差限界の指標である正確さの許容誤差限界 (B_A) とし、 $\pm 5\%$ を上限とした（低濃度の場合は5%ではなく、 B_A の値とすることもある）。“B”評価の評価幅は、日臨技指針における精度管理調査の許容誤差に関する現状の幅および体外診の性能確認幅を考慮し、最大5%とした。“C”評価に関しては、B評価幅を越え、この幅の最大1.5倍までとした。“C”評価を越えた場合は“D”評価とした（表2-1）。

ドライケミストリー法については、参加施設数が少ないという試料に対するマトリクス効果が大きく、技術水準を算出することが困難である。今年度はドライケミストリー法の評価幅について変更を行い、A評価幅にはウェット法のA評価幅を使用し、B評価幅には昨年度までのドライケミストリー法のA評価幅を使用し、C評価幅は例年同様とした（表2-2）。

表2-1：ウェット法許容幅

項目	A 評価	B 評価	C 評価
Glu	2.3%	5.0%	7.5%
TB	試料 11 0.2mg/dL	－	0.3mg/dL
	試料 12 5.0%	－	7.5%
Na	2.0mmol/L	3.0mmol/L	4.0mmol/L
K	1.9%	0.2mmol/L	0.3mmol/L
Cl	2.0mmol/L	3.0mmol/L	4.0mmol/L
Ca	0.2mg/dL	0.4mg/dL	0.6mg/dL
IP	3.5%	5.0%	7.5%
Fe	5.0%	－	7.5%
Mg	0.2mg/dL	－	0.3mg/dL
TP	1.2%	5.0%	7.5%
ALB	1.3%	5.0%	7.5%
UN	試料 11 5.0%	－	1.5mg/dL
	試料 12 5.0%	－	7.5%
Cre	試料 11 4.8%	0.1mg/dL	0.2mg/dL
	試料 12 4.8%	6.2%	7.5%
UA	5.0%	－	7.5%
TC	4.5%	5.0%	7.5%
TG	5.0%	7.0%	9.0%
HDLC	5.0%	－	7.5%
LDLC	5.0%	－	7.5%
AST	試料 11 5.0%	10.0%	15.0%
	試料 12 5.0%	6.3%	7.5%
ALT	試料 11 5.0%	10.0%	15.0%
	試料 12 5.0%	6.3%	7.5%
ALP	5.0%	6.3%	7.5%
CK	5.0%	6.3%	7.5%
LD	3.9%	5.7%	7.5%
GGT	試料 11 5.0%	10.0%	15.0%
	試料 12 5.0%	6.3%	7.5%
AMY	5.0%	6.3%	7.5%
ChE	4.7%	6.1%	7.5%
CRP	試料 11 0.1mg/dL	0.2mg/dL	0.3mg/dL
	試料 12 5.0%	7.5%	10.0%
HbA1c	5.0%	－	7.5%

表2-2：ドライケミストリー法許容幅

項目	A 評価	B 評価	C 評価
Glu	2.3%	10.0%	15.0%
TB	試料 11 0.2mg/dL	0.4mg/dL	0.5mg/dL
	試料 12 5.0%	0.4mg/dL	0.5mg/dL
Na	2.0mmol/L	3.0mmol/L	4.0mmol/L
K	1.9%	0.2mmol/L	0.3mmol/L
Cl	2.0mmol/L	3.0mmol/L	4.0mmol/L
Ca	0.2mg/dL	0.8mg/dL	1.2mg/dL
IP	3.5%	10.0%	15.0%
Fe	5.0%	10.0%	15.0%
Mg	0.2mg/dL	0.4mg/dL	0.6mg/dL
TP	1.2%	10.0%	15.0%
ALB	1.3%	10.0%	15.0%
UN	5.0%	10.0%	15.0%
Cre	試料 11 4.8%	0.2mg/dL	0.3mg/dL
	試料 12 4.8%	14.0%	21.0%
UA	5.0%	10.0%	15.0%
TC	4.5%	10.0%	15.0%
TG	5.0%	18.0%	27.0%
HDLC	5.0%	10.0%	15.0%
LDLC	－	－	－
AST	5.0%	20.0%	30.0%
ALT	5.0%	20.0%	30.0%
ALP	5.0%	20.0%	30.0%
CK	5.0%	20.0%	30.0%
LD	3.9%	20.0%	30.0%
GGT	5.0%	20.0%	30.0%
AMY	5.0%	20.0%	30.0%
ChE	4.7%	20.0%	30.0%
CRP	試料 11 0.1mg/dL	0.2mg/dL	0.4mg/dL
	試料 12 5.0%	20.0%	30.0%

体外診の性能確認幅は、平成9年8月28日医薬審第181号厚生省医薬安全局審査管理課長通知「体外診断用医薬品の承認申請上の取扱いについて」の別表に記載されている許容変動係数（範囲）を用いた（表3）。

表3：平成9年8月28日医薬審第181号厚生省医薬安全局審査管理課長通知「体外診断用医薬品の承認申請上の取扱いについて」

項目	許容変動係数	要精度管理範囲
AST	10%	15～35 U/L
ALT	10%	15～50 U/L
γ-GT	10%	M:20～60 U/L F:20～50 U/L
HDL-C	5%	30～55 mg/dL
LD	10%	120～200 U/L
ALP	10%	150～250 U/L
ALB	5%	3～5 g/dL
Cl	2%	90～110 mmol/L
K	0.2 mmol/L	3～5 mmol/L
Ca	0.2 mmol/L	8～10 mg/dL
Glu	5%	90～140 mg/dL
Cre	0.1 mg/dL	0.5～1.5 mg/dL
CK	10%	100～200 U/L
TC	5%	150～250 mg/dL
TP	5%	6～8 g/dL
TB	0.2 mg/dL	0.6～1.6 mg/dL
TG	9%	90～180 mg/dL
Na	2 mmol/L	130～150 mmol/L
UA	5%	5～8 mg/dL
UN	1 mg/dL, 5%	10～25 mg/dL
HbA1c	5%	5.3～6.3%

3. ツインプロット

ツインプロットは、全施設の報告値をプロットし、±3SD 2回除外後のデータを用いて、95%信頼楕円を作成した。

4. 測定方法別集計結果

各施設測定値の極端値を除去後、±3SD切断法を2回実施した測定方法別の集計結果と全報告値の集計結果を示す。なお、全施設CV（%）はウェット法のみを対象とした。

Ⅵ. 解析結果及び考察

1. グルコース

ウェット法における全施設CV（%）は1.3～1.8%であり良好な結果が得られた。方法別採用頻度は、ヘキソキナーゼ(HK)法が87施設（79%）、ブドウ糖酸化酵素（GOD）電極法が16施設（15%）であった。

グルコースは、非常に収束している項目のひとつであり、測定方法間差も認められない。“C”・“D”評価の施設は、速やかに原因を追究し、測定プロセスの改善を図る必要がある（図1・図2・表4）。

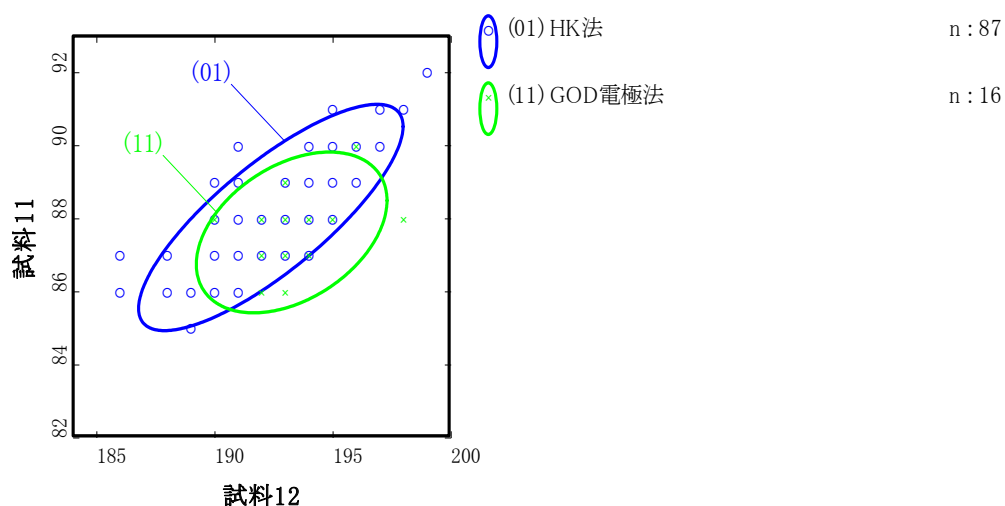


図1：グルコース ウェット ツインプロット図(mg/dL)

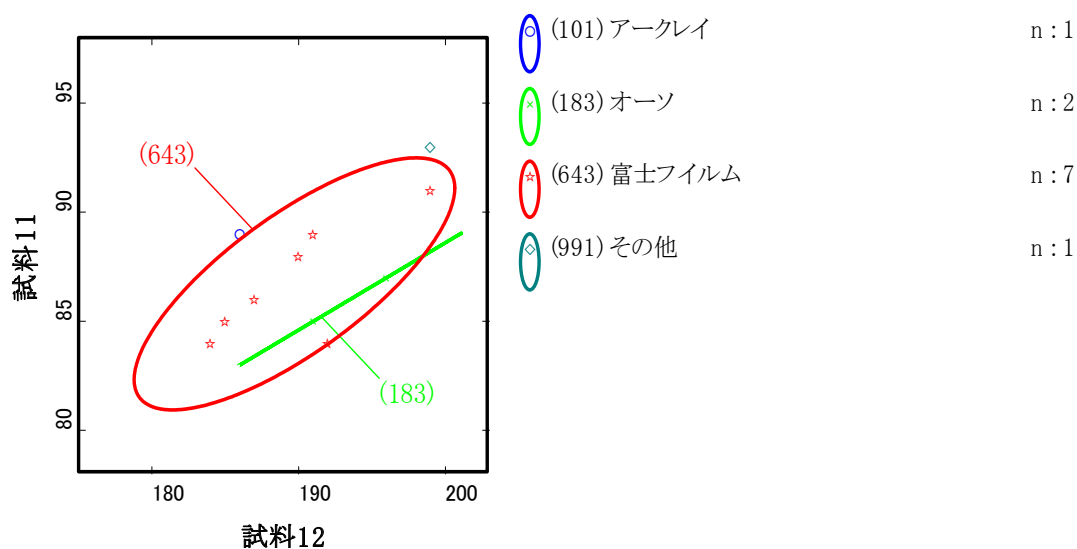


図2：グルコース ドライ ツインプロット図(mg/dL)

表4：グルコース 測定方法別集計結果

	全体				(01)HK 法				(11) GOD 電極法			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	106	88.1	1.6	1.76	87	88.0	1.4	1.64	16	87.6	1.0	1.17
試料 12	109	192.6	2.5	1.30	87	192.4	1.6	1.35	16	193.3	1.9	0.97
	(101)アークレイ				(183)オーズ				(643)富士フィルム			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	1	89.0	-	-	2	86.0	1.4	1.64	7	86.7	2.7	3.10
試料 12	1	186.0	-	-	2	193.5	3.5	1.83	7	189.7	5.1	2.68

2. 総ビリルビン・直接ビリルビン

総ビリルビン、直接ビリルビンの評価幅は、“臨床検査精度管理調査の定量検査評価法と試料に関する日臨技指針”にある「現在の技術水準から算出した施設間許容誤差限界」を引用した。なお、直接ビリルビンは評価対象外とし、SDI評価のみとした。

総ビリルビンの方法別採用頻度は、酵素法が58施設（55%）、バナジン酸酸化法が43施設（41%）、ジアゾ法が1施設（1%）であった。直接ビリルビンの参加施設は、総ビリルビンの80%であり、酵素法が46施設（55%）、バナジン酸酸化法が38施設（45%）であり、総ビリルビンと同程度であった。総ビリルビン、直接ビリルビンは、従来より測定方法間差が指摘されており、その原因として、各試薬により δ ビリルビンの反応性が異なることが報告されている。今後、標準法および標準物質の早急な整備が望まれる（図3・図4・図5・表5・表6）。

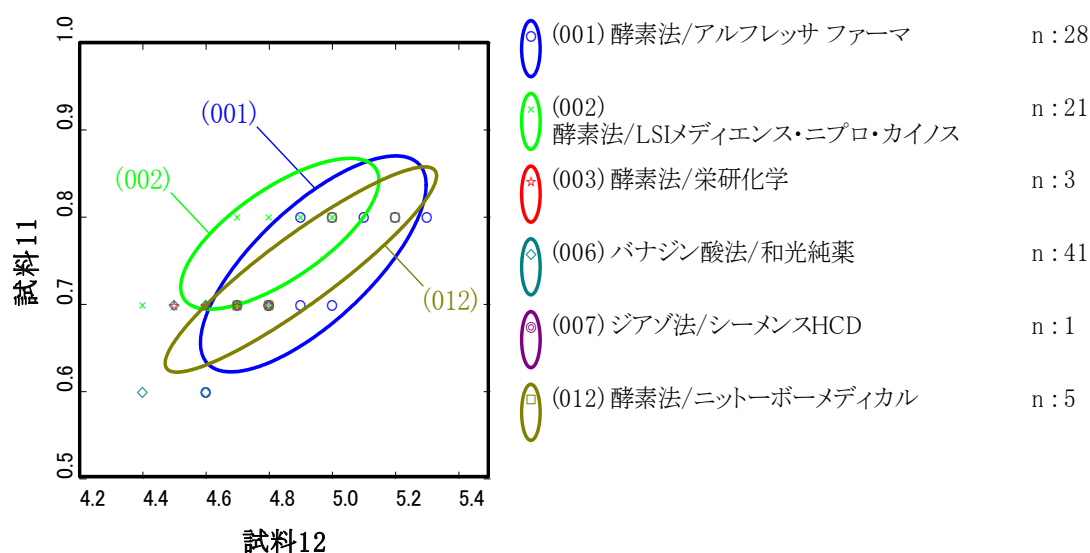


図3：総ビリルビン ウェット ツインプロット図(mg/dL)

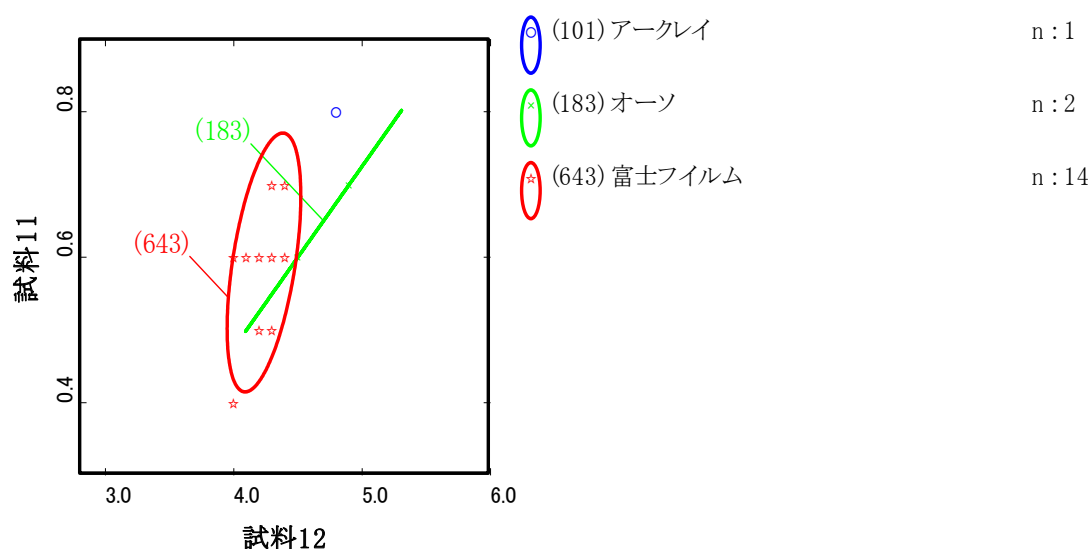


図4：総ビリルビン ドライ ツインプロット図(mg/dL)

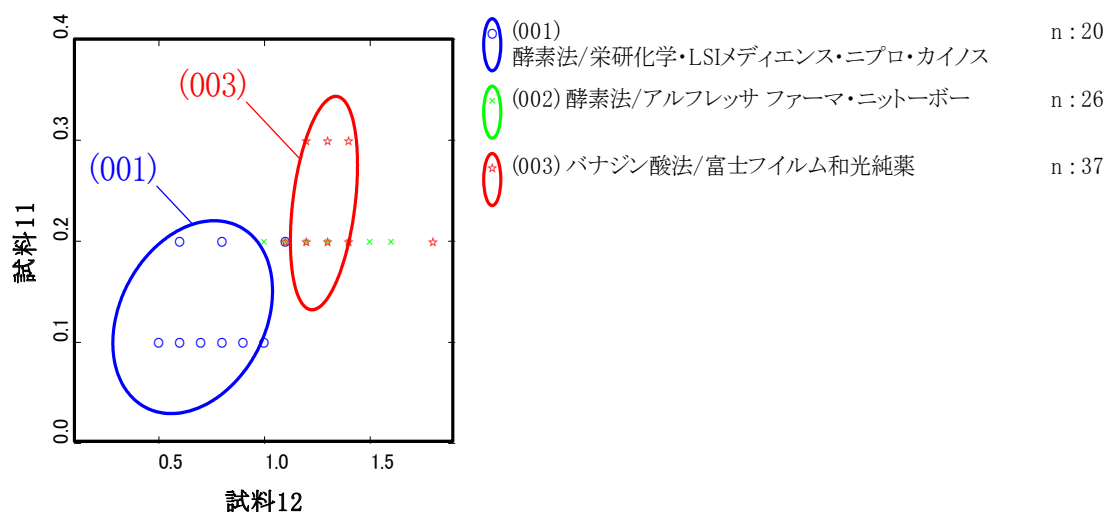


図5：直接ビリルビン ウェット ツインプロット図(mg/dL)

表5：総ビリルビン 測定方法別集計結果

全体					(001) 酵素法/アルフレッサファーマ				(002) 酵素法/LSI メディエンス・ニプロ・カynos			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	104	0.73	0.06	7.74	29	0.75	0.06	7.72	21	0.78	0.04	5.15
試料 12	102	4.79	0.18	3.83	29	4.95	0.18	3.56	21	4.83	0.15	3.02
(003) 酵素法/栄研化学					(006) バナジン酸法/富士フイルム和光純薬				(007) ジアゾ法/シーメンス HCD			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	3	0.70	0.00	0.00	43	0.70	0.00	0.00	1	0.70	-	-
試料 12	3	4.60	0.00	0.00	42	4.60	0.08	1.64	1	4.80	-	-
(012) 酵素法/ニッターボーメディカル					(101) アークレイ				(183) オート			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	5	0.74	0.05	7.40	1	0.80	-	-	2	0.65	0.07	10.88
試料 12	5	4.90	0.20	4.08	1	4.80	-	-	2	4.70	0.28	6.02
(643) 富士フイルム												
	n	mean	SD	CV(%)								
試料 11	14	0.59	0.08	13.98								
試料 12	14	4.24	0.13	3.15								

表 6：直接ビリルビン 測定方法別集計結果

全体					(001) 酵素法/栄研化学・LSI メディエ ンス・ニプロ・カイノス				(002) 酵素法/ アルフレッサファーマ・ニットーボー			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	84	0.20	0.06	29.73	20	0.13	0.04	35.54	26	0.20	0.00	0.00
試料 12	84	1.13	0.30	26.85	20	0.66	0.18	26.65	26	1.26	0.17	13.65
(003) バナジン酸法/富士フイル ム和光純薬					(183) オーソ				(643) 富士フイルム			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	38	0.24	0.05	20.64	1	0.00	–	–	4	0.13	0.05	40.0
試料 12	37	1.28	0.07	5.77	1	0.00	–	–	4	1.70	0.00	0.00

3. ナトリウム・カリウム・クロール

全施設CV(%)は、ナトリウムが0.6~0.7%、カリウムが0.8~1.5%、クロールが0.9~1.0%であった。

クロールドライケミストリー法において、マトリクス効果と思われる測定値の乖離を認めたため、富士フィルムのみ別評価とした(図6・図7・図8・図9・図10・図11・表7・表8・表9)。

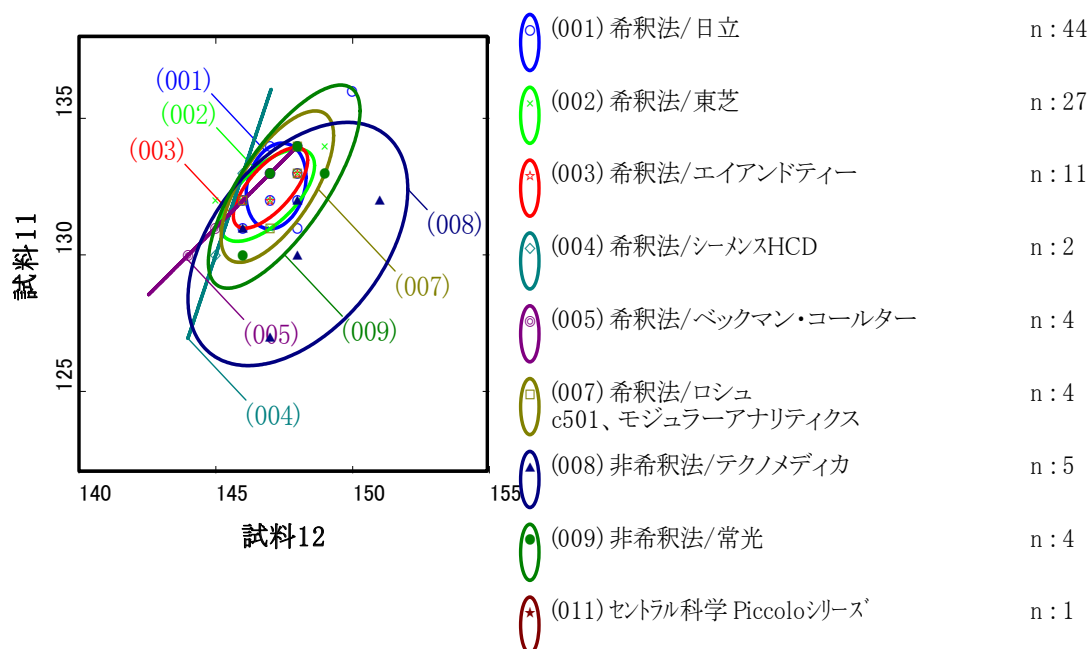


図6：ナトリウム ウェット ツインプロット図(mmol/L)

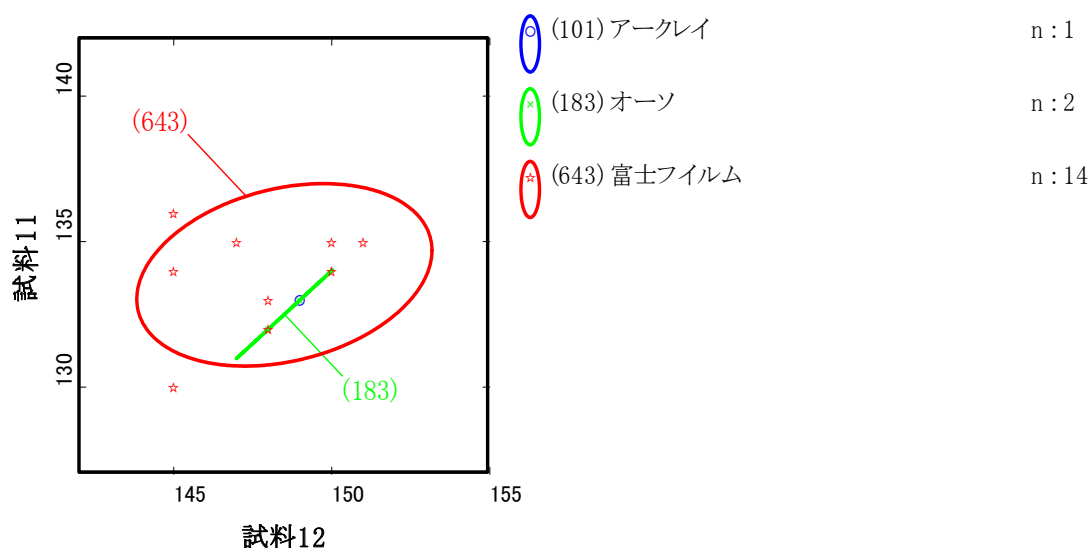


図7：ナトリウム ドライ ツインプロット図(mmol/L)

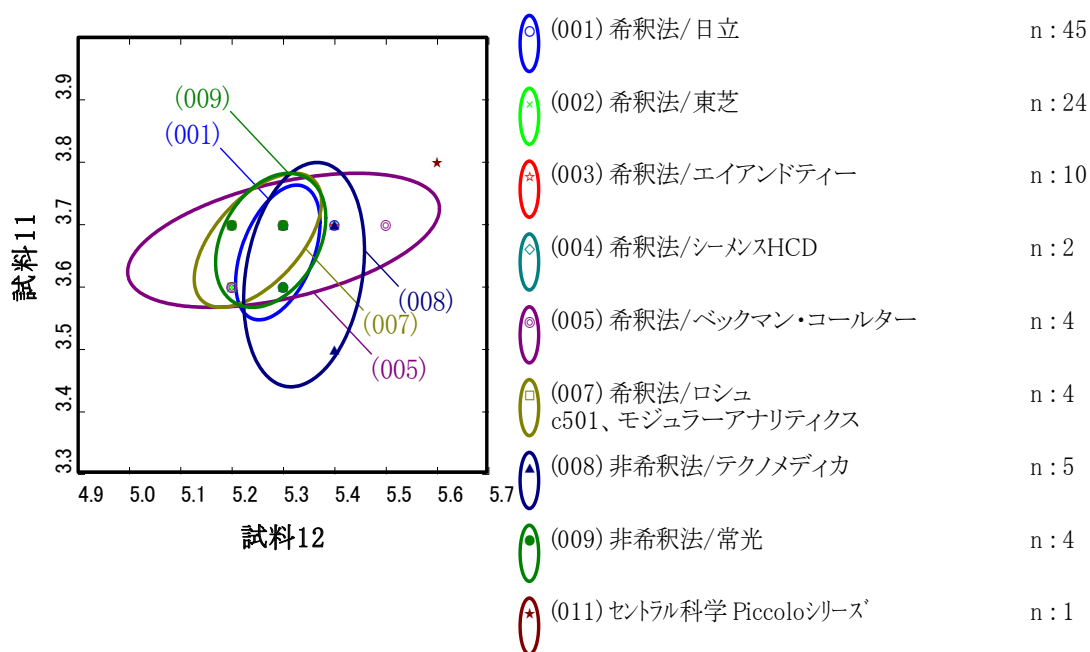


図8：カリウム ウェット ツインプロット図 (mmol/L)

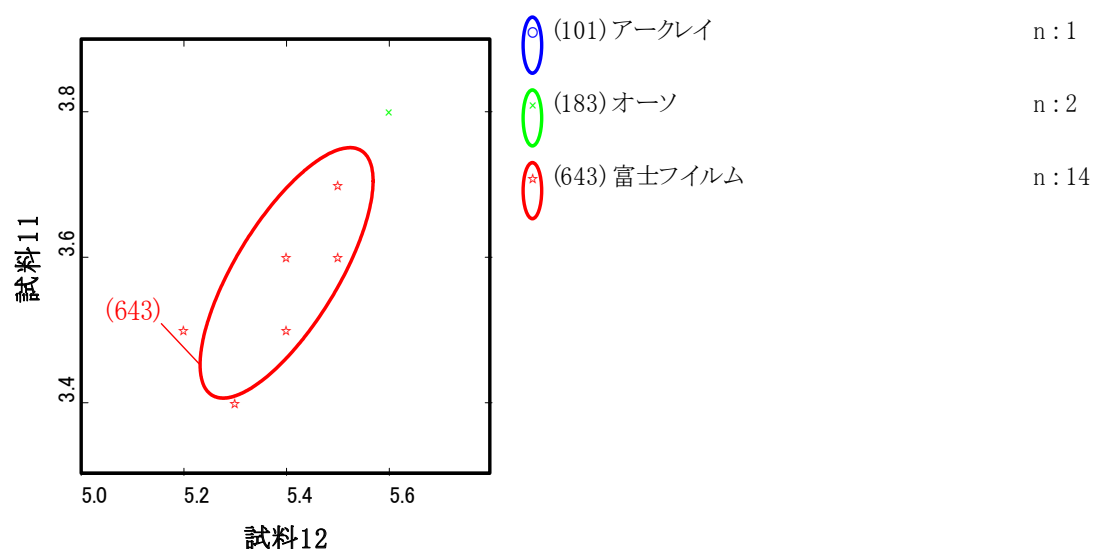


図9：カリウム ドライ ツインプロット図 (mmol/L)

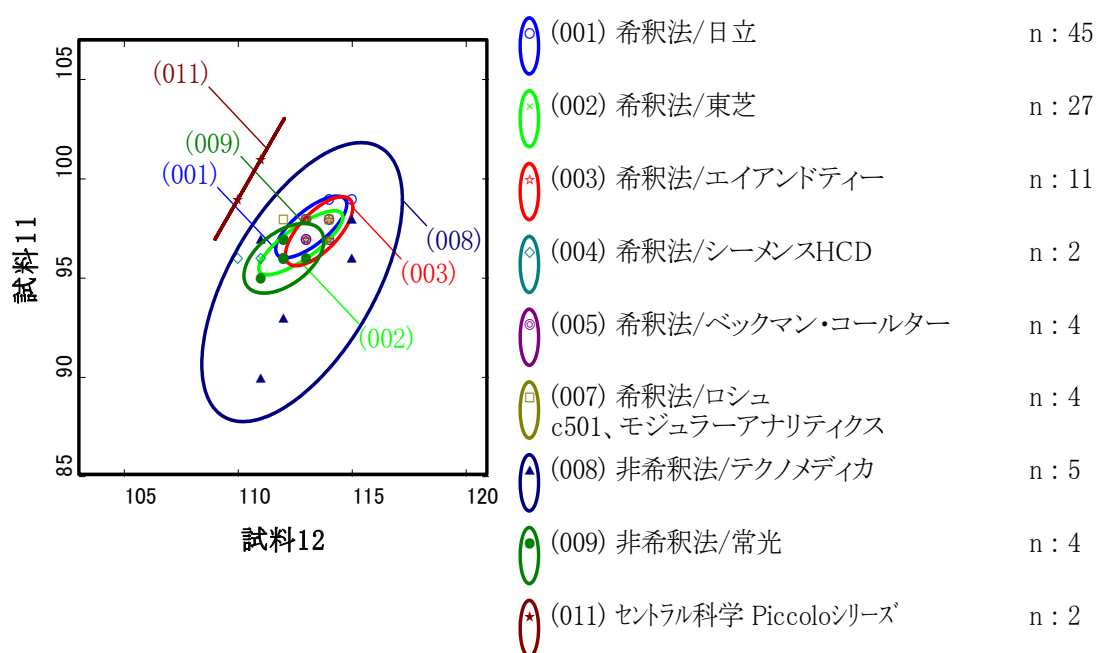


図10：クロール ウェット ツインプロット図 (mmol/L)

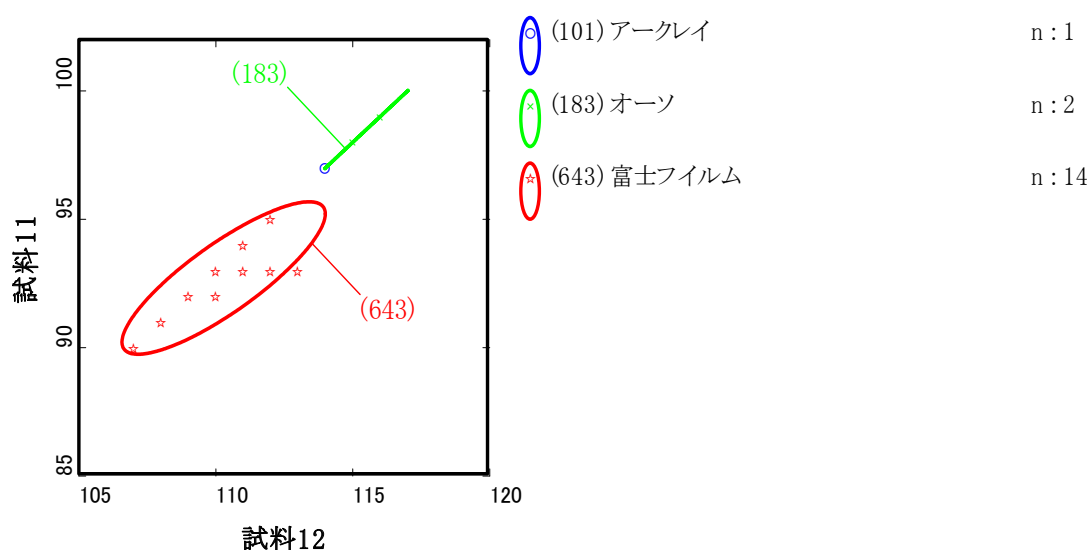


図11：クロール ドライ ツインプロット図 (mmol/L)

表7：ナトリウム 測定方法別集計結果

全体					(001) 希釈法/日立				(002) 希釈法/東芝			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	106	132.3	0.9	0.69	44	132.5	0.7	0.55	27	132.2	0.8	0.59
試料 12	106	147.1	0.8	0.57	44	147.2	0.5	0.35	27	146.9	0.8	0.55
(003) 希釈法/エイアンドティー					(004) 希釈法/シーメンス HCD				(005) 希釈法/ ベックマン・コールター			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	11	132.5	0.7	0.52	2	131.5	2.1	1.61	4	131.3	1.3	0.96
試料 12	11	147.0	0.6	0.43	2	145.5	0.7	0.49	4	145.3	0.7	0.49
(007) 希釈法/ロシュ c501 モジュラーアナリティクス					(008) 非希釈法/テクノメディカ				(009) 非希釈法/常光			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	4	132.5	1.3	0.97	5	130.4	2.1	1.59	4	132.5	1.7	1.31
試料 12	4	147.3	1.0	0.65	5	148.0	1.9	1.26	4	147.5	1.3	0.88
(011) セントラル科学 Piccolo シリーズ					(101) アークレイ				(183) オーソ			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	1	128.0	-	-	1	133.0	-	-	2	132.5	0.7	0.53
試料 12	1	138.0	-	-	1	149.0	-	-	2	148.5	0.7	0.48
(643) 富士フイルム												
	n	mean	SD	CV(%)								
試料 11	14	133.9	1.5	1.09								
試料 12	14	148.5	2.2	1.46								

表8：カリウム 測定方法別集計結果

全体					(001) 希釈法/日立				(002) 希釈法/東芝			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	106	3.66	0.06	1.53	45	3.66	0.05	1.37	27	3.65	0.05	1.40
試料 12	103	5.3	0.04	0.83	45	5.29	0.04	0.72	24	5.30	0.00	0.00
(003) 希釈法/エイアンドティー					(004) 希釈法/シーメンス HCD				(005) 希釈法/ ベックマン・コールター			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	10	3.70	0.00	0.00	2	3.60	0.00	0.00	4	3.68	0.05	1.36
試料 12	11	5.32	0.04	0.76	2	5.30	0.00	0.00	4	5.30	0.14	2.67
(007) 希釈法/ロシュ c501 モジュラーアナリティクス					(008) 非希釈法/テクノメディカ				(009) 非希釈法/常光			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	N	mean	SD	CV(%)
試料 11	4	3.68	0.05	1.36	5	3.62	0.08	2.31	4	3.68	0.05	1.36
試料 12	4	5.25	0.06	1.10	5	5.34	0.05	1.03	4	5.28	0.05	0.95
(011) セントラル科学 Piccolo シリーズ					(101) アークレイ				(183) オーン			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	1	3.80	-	-	1	3.90	-	-	2	3.80	0.00	0.00
試料 12	1	5.6	-	-	1	5.60	-	-	2	5.60	0.00	0.00
(643) 富士フイルム												
	n	mean	SD	CV(%)								
試料 11	14	5.40	0.08	2.24								
試料 12	14	5.40	0.08	1.45								

表9：クロール 測定方法別集計結果

全体					(001) 希釈法/日立				(002) 希釈法/東芝			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	102	97.3	0.9	0.90	45	97.6	0.7	0.74	27	96.8	0.8	0.78
試料 12	1.6	112.9	1.1	0.96	45	113.2	0.7	0.64	27	112.7	0.9	0.76
(003) 希釈法/エイアンドティー					(004) 希釈法/シーメンス HCD				(005) 希釈法/ ベックマン・コールター			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	11	97.4	0.8	0.83	2	96.0	0.0	0.00	4	97.3	0.5	0.51
試料 12	11	113.5	0.7	0.61	2	110.5	0.7	0.64	4	113.0	0.0	0.00
(007) 希釈法/ロシュ c501 モジュラーアナリティクス					(008) 非希釈法/テクノメディカ				(009) 非希釈法/常光			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	N	mean	SD	CV(%)
試料 11	4	98.0	0.0	0.00	5	94.8	3.3	3.45	4	96.0	0.8	0.85
試料 12	4	113.0	1.0	0.85	5	112.8	2.0	1.82	4	112.0	0.8	0.73
(011) セントラル科学 Piccolo シリーズ					(101) アークレイ				(183) オーン			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	2	100.0	1.4	1.41	1	97.0	–	–	2	98.5	0.7	0.72
試料 12	2	110.5	0.7	0.64	1	114.0	–	–	2	115.5	0.7	0.61
(643) 富士フイルム												
	n	mean	SD	CV(%)								
試料 11	14	92.7	1.4	1.49								
試料 12	14	110.3	1.7	1.57								

4. カルシウム

ウェット法における全施設CV（％）は1.1～1.6％であり良好な結果が得られた。

方法別採用頻度は、アルセナゾⅢ法が50施設（50％）、酵素法が38施設（38％）、クロロホスホナゾⅢ法が6施設（6％）、o-CPC法が4施設（4％）であった（図12・図13・表10）。

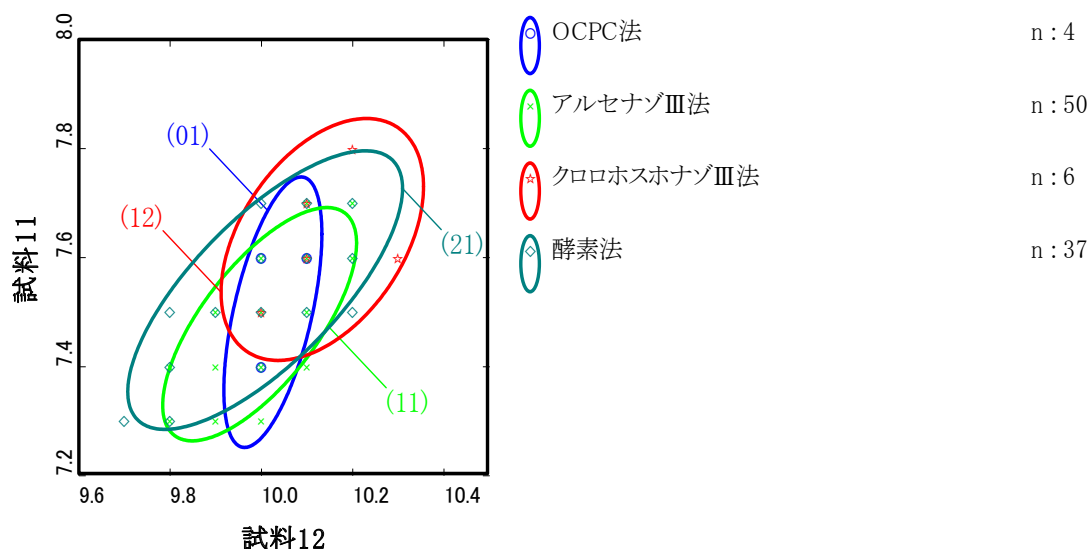


図12：カルシウム ウェット ツインプロット図(mg/dL)

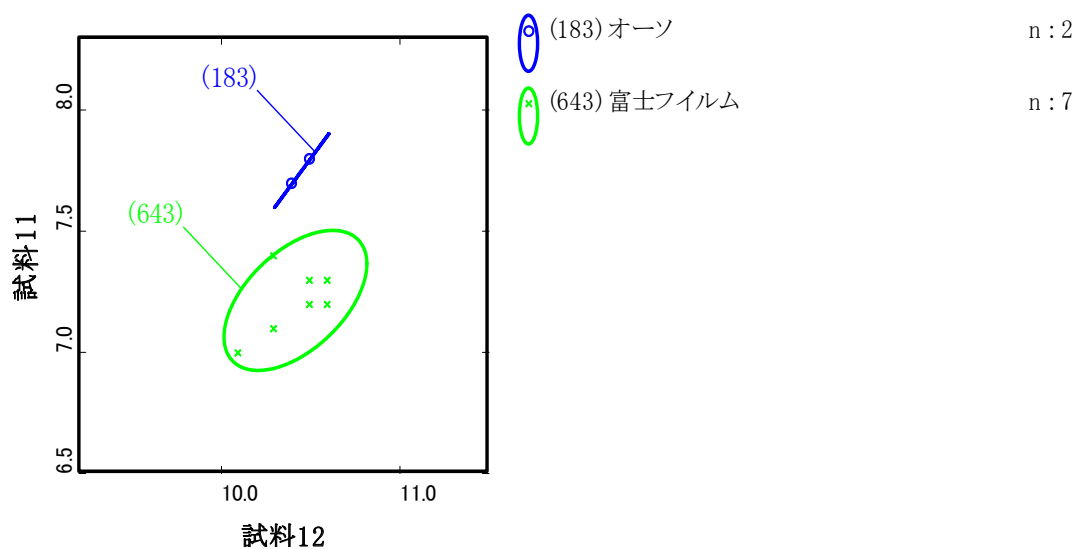


図13：カルシウム ドライ ツインプロット図(mg/dL)

表10：カルシウム 測定方法別集計結果

全体					(01) OCPC 法				(11) アルセナゾⅢ法			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	100	7.51	0.12	1.61	4	7.50	0.12	1.54	50	7.48	0.10	1.33
試料 12	97	10.01	0.11	1.13	4	10.03	0.05	0.50	50	10.00	0.10	0.99
(12) クロロホスホナゾⅢ法					(21) 酵素法				(183) オーソ			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	6	7.63	0.10	1.35	38	7.53	0.13	1.72	2	7.75	0.07	0.91
試料 12	6	10.13	0.10	1.02	37	10.01	0.14	1.40	2	10.45	0.07	0.98
(643) 富士フィルム												
	n	mean	SD	CV(%)								
試料 11	7	7.21	0.13	1.86								
試料 12	7	10.41	0.19	1.79								

5. 無機リン

方法別採用頻度は、酵素法が83施設（95%）、モリブデン酸・UV法が4施設（5%）であった。昨年度はモリブデン・ブルー法が1施設で採用されていたが、本年度は0施設であった。全施設のCV（%）は1.4～1.8%と良好な結果であった（図14・表11）。

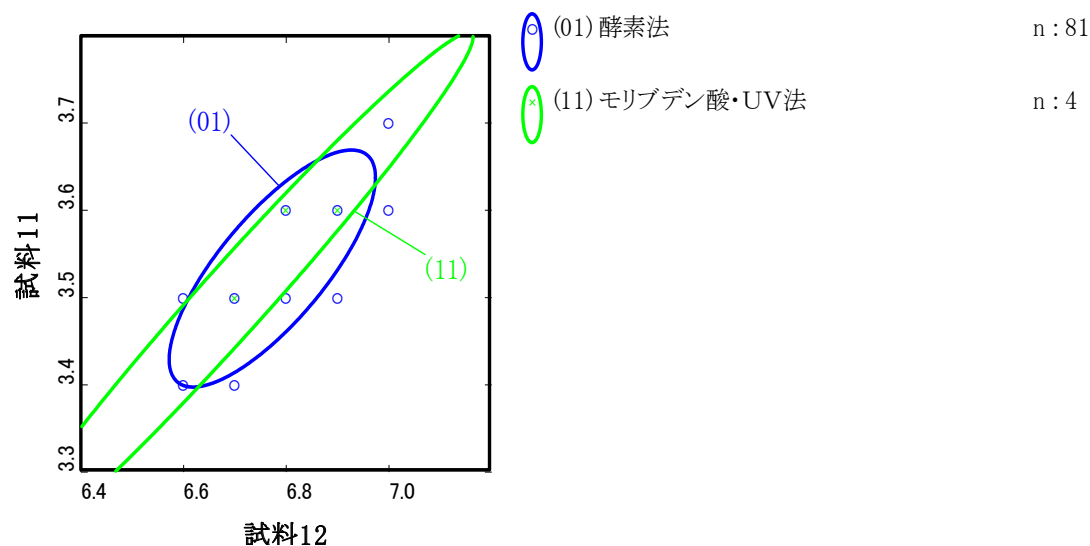


図14：無機リン ウェット ツインプロット図(mg/dL)

表11：無機リン 測定方法別集計結果

	全体				(01)酵素法				(11)モリブデン酸・UV 法			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	84	3.53	0.06	1.78	81	3.53	0.06	1.79	4	3.50	0.14	4.04
試料 12	85	6.77	0.09	1.40	82	6.77	0.09	1.40	4	6.70	0.22	3.22
(183)オーソ												
	n	mean	SD	CV(%)								
試料 11	1	3.6	—	—								
試料 12	1	7.1	—	—								

6. 血清鉄

方法別採用頻度はNitroso-PSAP法が79施設（95%）、
バソフェナントロリン法が4施設（5%）であった。

全体ではCV（%）が0.9～1.3%と良好な結果であった（図15・表12）。

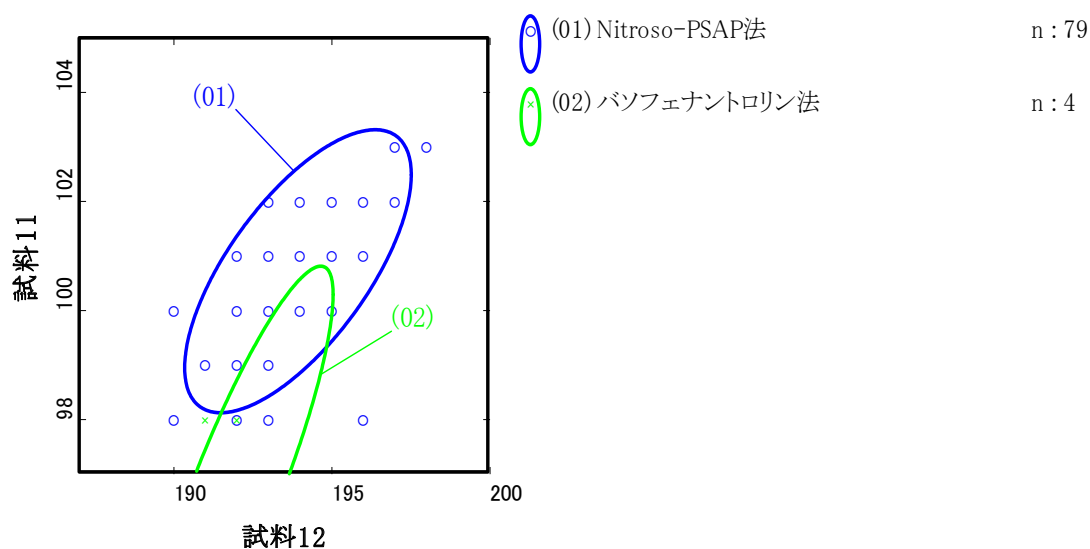


図15：血清鉄 ウェット ツインプロット図(μg/dL)

表12：血清鉄 測定方法別集計結果

	全体				(01) Nitroso-PSAP 法				(02) バソフェナントロリン法			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	82	100.6	1.3	1.31	79	100.7	1.2	1.20	4	96.8	1.9	1.96
試料 12	83	193.8	1.7	0.88	79	193.9	1.7	0.86	4	192.0	1.4	0.74
(183)オーソ												
	n	mean	SD	CV(%)								
試料 11	1	111.0	—	—								
試料 12	1	219.0	—	—								

7. マグネシウム

マグネシウムの参加施設は130施設中57施設（昨年度124施設中57施設）であり、参加施設数は昨年度と同じであった。そのうち、酵素法を採用している施設は48施設（84%）、色素法は9施設（16%）であった。マグネシウムは標準物質が存在する項目であるため、項目一括評価としている。本年度は測定方法間に大差は認められなかったが、酵素法のCV（%）は1.8～3.0%、色素法のCV（%）は2.8～3.6%であり、酵素法に比して色素法の方がやや大きい傾向を認めた（図16・表13）。

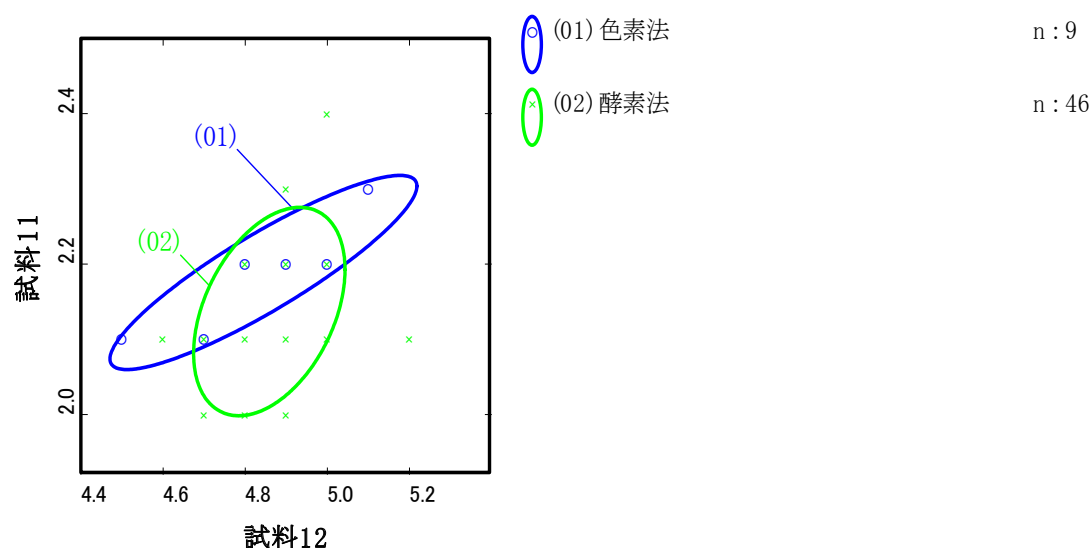


図16：マグネシウム ウェット ツインプロット図(mg/dL)

表13：マグネシウム 測定方法別集計結果

	全体				(01) 色素法				(02) 酵素法			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	56	2.14	0.07	3.07	9	2.19	0.06	2.75	47	2.14	0.06	3.00
試料 12	55	4.87	0.09	1.91	9	4.84	0.09	3.59	47	4.86	0.09	1.80

8. 総蛋白

総蛋白はビューレット法が昨年度より6施設増加し、103施設（97%）で採用されている。全体のCV（%）は1.2～1.3%であり、非常に収束した項目である（図17・図18・表14）。

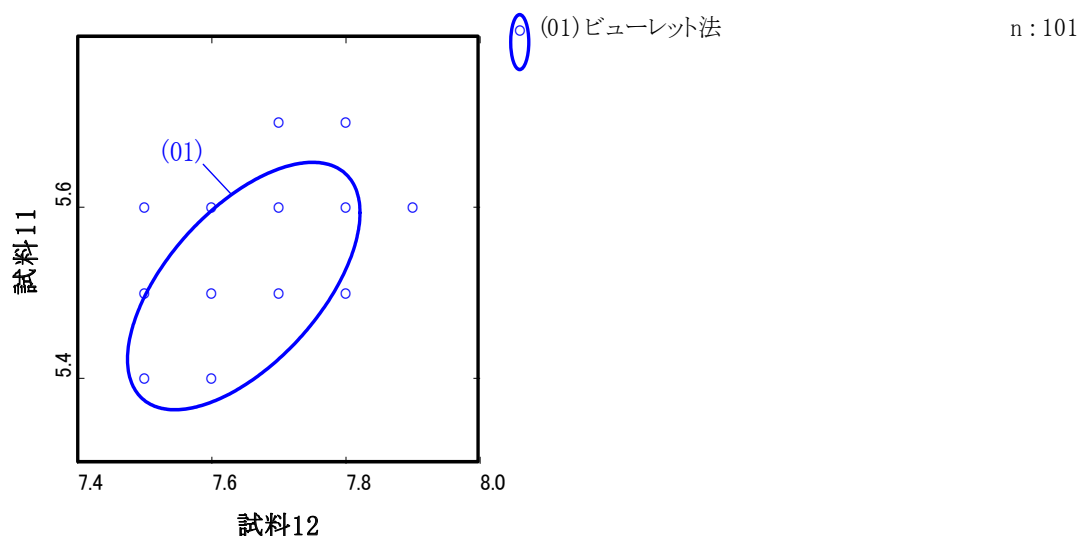


図17：総蛋白 ウェット ツインプロット図(g/dL)

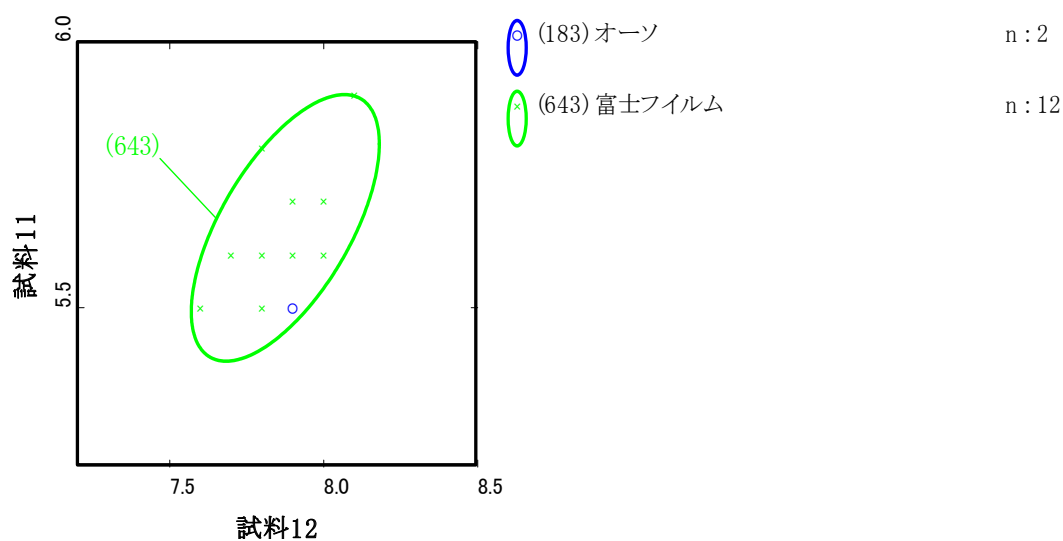


図18：総蛋白 ドライ ツインプロット図(g/dL)

表14：総蛋白 測定方法別集計結果

全体					(01)ビューレット法				(183)オーズ			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	105	5.50	0.07	1.28	102	5.51	0.07	1.27	2	5.50	0.00	0.00
試料 12	105	7.65	0.09	1.15	102	7.65	0.08	1.10	2	7.90	0.00	0.00
(643)富士フイルム												
	n	mean	SD	CV(%)								
試料 11	12	5.65	0.12	2.07								
試料 12	12	7.88	0.14	1.81								

9. アルブミン

ウェット法の測定方法別採用頻度はBCP改良法が93施設（90%）、BCG法が8施設（8%）、BCP法が2施設（2%）であった。BCP改良法およびBCP法はアルブミンに特異性が高く、グロブリンとほとんど反応しない。

BCP改良法はグロブリンを測り込むというBCG法の問題点を改善し、かつ還元型アルブミンと酸化型アルブミンの反応差を解消した測定法で、AiCCLS（愛知県臨床検査標準化協議会）の推奨測定法となっている（図19・図20・表15）。

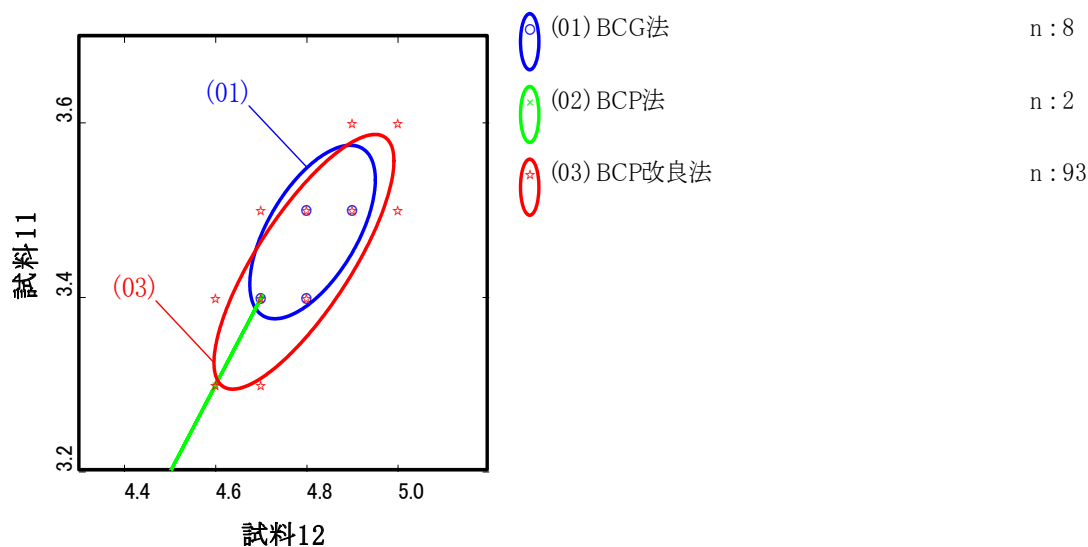


図19：アルブミン ウェット ツインプロット図(g/dL)

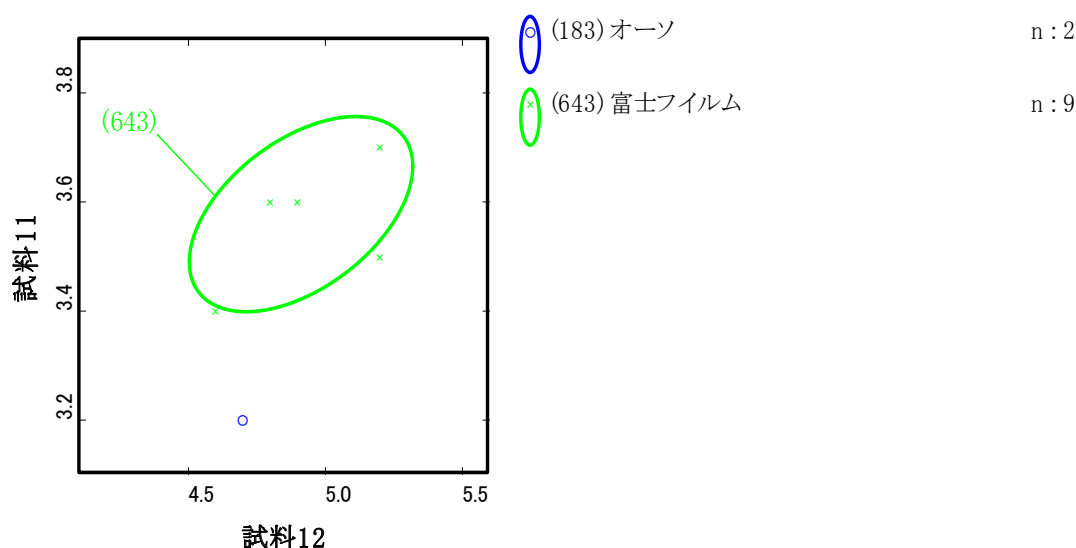


図19：アルブミン ドライ ツインプロット図(g/dL)

表15：アルブミン 測定方法別集計結果

	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	Mean	SD	CV(%)
試料 11	102	3.44	0.07	1.98	8	3.48	0.05	1.33	2	3.25	0.07	2.18
試料 12	102	4.79	0.09	1.91	8	4.81	0.06	1.33	2	4.55	0.07	1.55
(03)BCP 改良法				(183)オーソ				(643)富士フイルム				
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	93	3.44	0.07	1.97	2	3.15	0.07	2.24	9	3.58	0.08	2.33
試料 12	93	4.79	0.09	1.92	2	4.70	0.00	0.00	9	4.91	0.19	3.87

10. 尿素窒素

方法別採用頻度は、アンモニア消去法または回避法を採用している施設が100施設（94%）、未消去法を採用または未回答の施設が6施設（6%）であり、アンモニア消去法または回避法が多数を占めていた。全体のCV（%）は1.5～1.8%と良好であった（図21・図22・表16）。

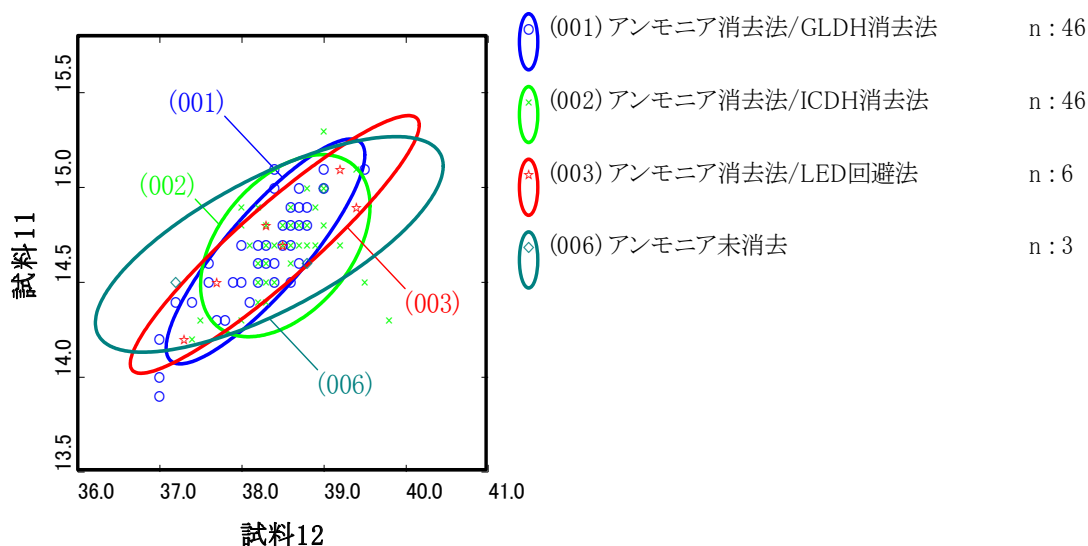


図21：尿素窒素 ウェット ツインプロット図(mg/dL)

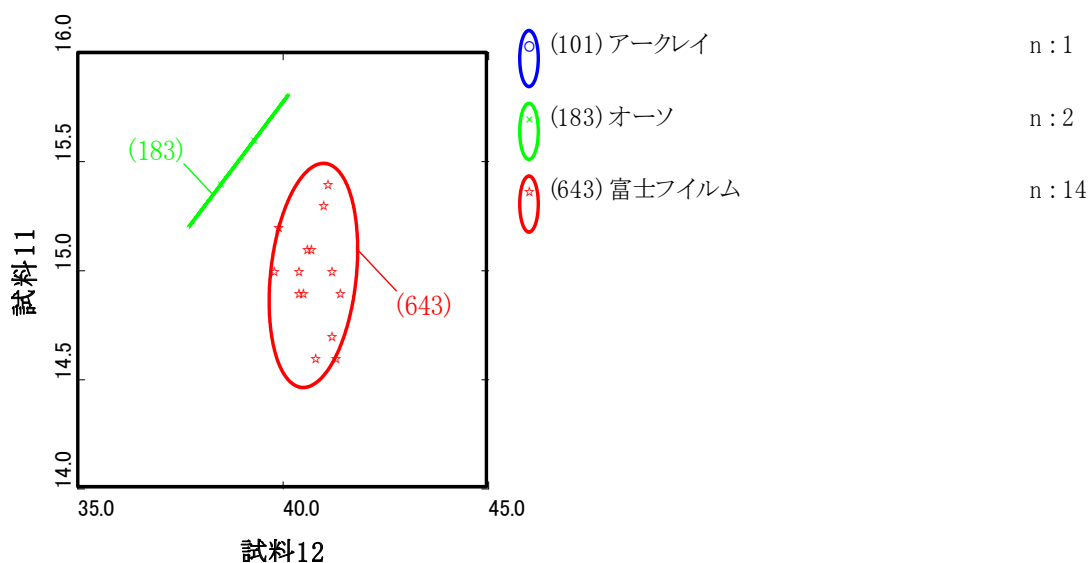


図22：尿素窒素 ドライ ツインプロット図(mg/dL)

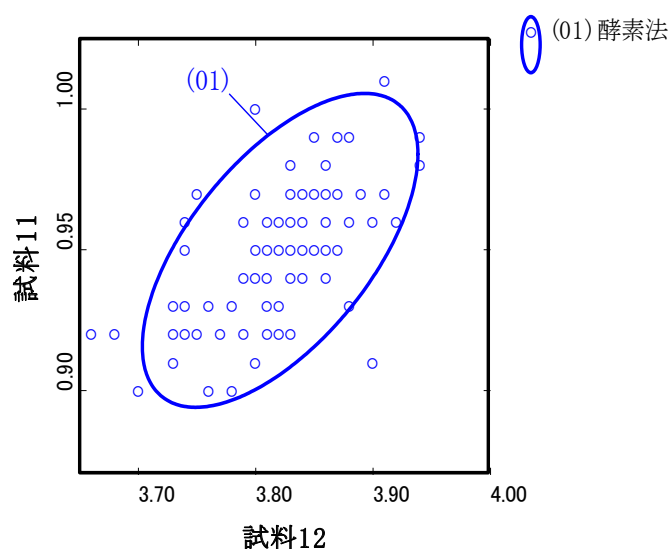
表16：尿素窒素 測定方法別集計結果

全体					(001) アンモニア消去法/ GLDH 消去法				(002) アンモニア消去法/ ICDH 消去法			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	104	14.67	0.27	1.81	46	14.66	0.28	1.88	46	14.69	0.22	1.52
試料 12	103	38.41	0.58	1.50	46	38.29	0.56	1.47	47	38.56	0.51	1.32
(003) アンモニア消去法/ LED 回避法					(006) アンモニア未消去				(101) アークレイ			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	6	14.70	0.32	2.15	3	14.70	0.26	1.80	1	18.00	–	–
試料 12	6	38.40	0.82	2.13	3	38.33	0.99	2.57	1	37.00	–	–
(183) オース					(643) 富士フイルム							
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)				
試料 11	2	15.5	0.14	0.91	14	14.98	0.24	1.60				
試料 12	2	38.90	0.57	1.45	14	40.74	0.50	1.23				

11. クレアチニン

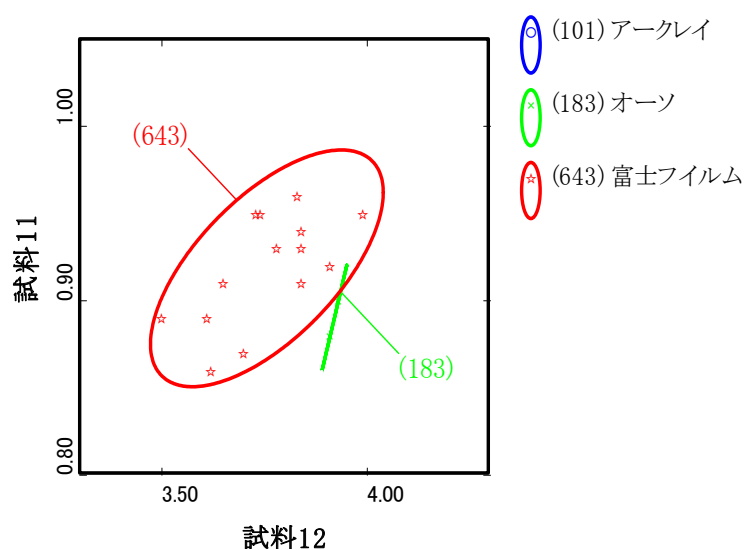
酵素法のCV(%)は1.4~3.0%であり、昨年度よりやや大きい結果であった。測定方法の採用状況は、酵素

法が103施設(98%)であり、酵素法が多数を占めていた(図23・図24・表17)。



n: 98

図23: クレアチニン ウェット ツインプロット図(mg/dL)



n: 1

n: 2

n: 14

図24: クレアチニン ドライ ツインプロット図(mg/dL)

表17: クレアチニン 測定方法別集計結果

	全体				(01) 酵素法				(101) アークレイ			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	102	0.948	0.029	3.09	100	0.948	0.028	2.93	1	0.800	-	-
試料 12	102	3.821	0.055	1.43	101	3.822	0.055	1.44	1	3.200	-	-
	(183) オーン				(643) 富士フィルム							
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)				
試料 11	2	0.890	0.014	1.59	14	0.919	0.032	3.44				
試料 12	2	3.920	0.014	0.36	14	3.756	0.132	3.51				

12. 尿酸

1.3～2.0%であり、昨年度と同様に収束していた（図25・図26・表18）。

尿酸は、ウェット法を採用している施設のうち97%がウリカーゼPOD法を採用している。全体のCV（%）は

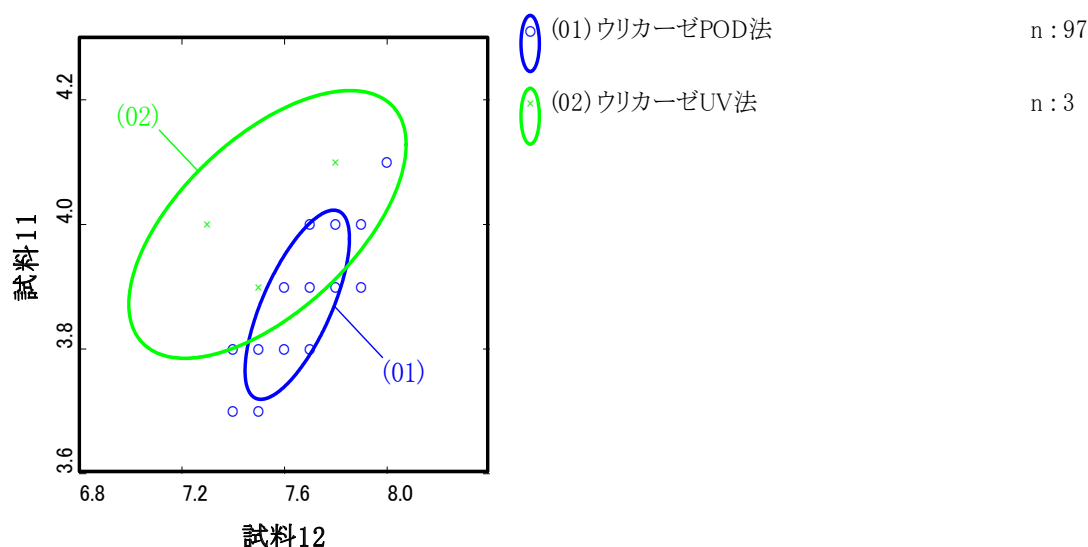


図25：尿酸 ウェット ツインプロット図(mg/dL)

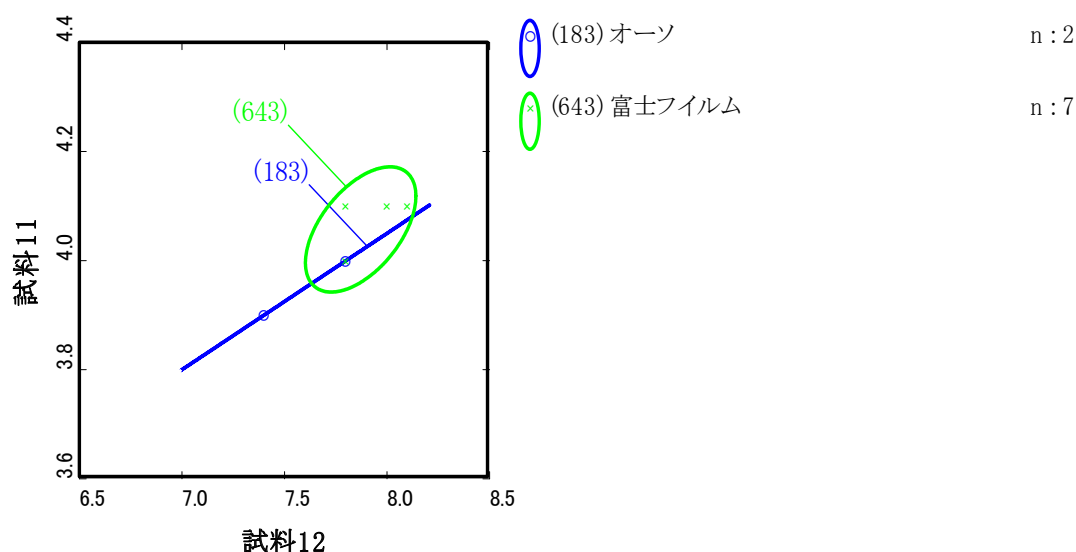


図26：尿酸 ドライ ツインプロット図(mg/dL)

表18：尿酸 測定方法別集計結果

全体					(01)ウリカーゼ POD 法				(02)ウリカーゼ UV 法			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	101	3.88	0.08	1.99	97	3.87	0.07	1.83	3	4.00	0.10	2.50
試料 12	99	7.65	0.10	1.26	97	7.65	0.09	1.24	3	7.53	0.25	3.34
(183) オーズ					(643) 富士フイルム							
	N	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)				
試料 11	2	3.95	0.07	1.79	7	4.06	0.05	1.32				
試料 12	2	7.60	0.28	3.72	7	7.87	0.13	1.59				

13. 総コレステロール

総コレステロールはウェット法で測定している全ての施設がコレステロール酸化酵素法（COD-POD法）を採

用していた。

総コレステロールの全施設CV（%）は1.6～1.7%であり、良好な結果であった（図27・図28・表19）。

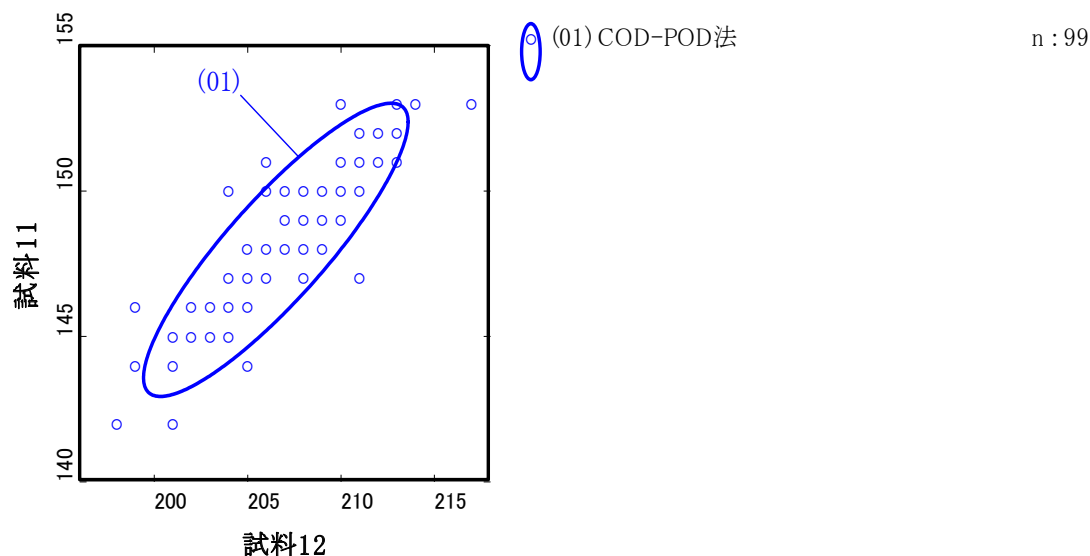


図27：総コレステロール ウェット ツインプロット図(mg/dL)

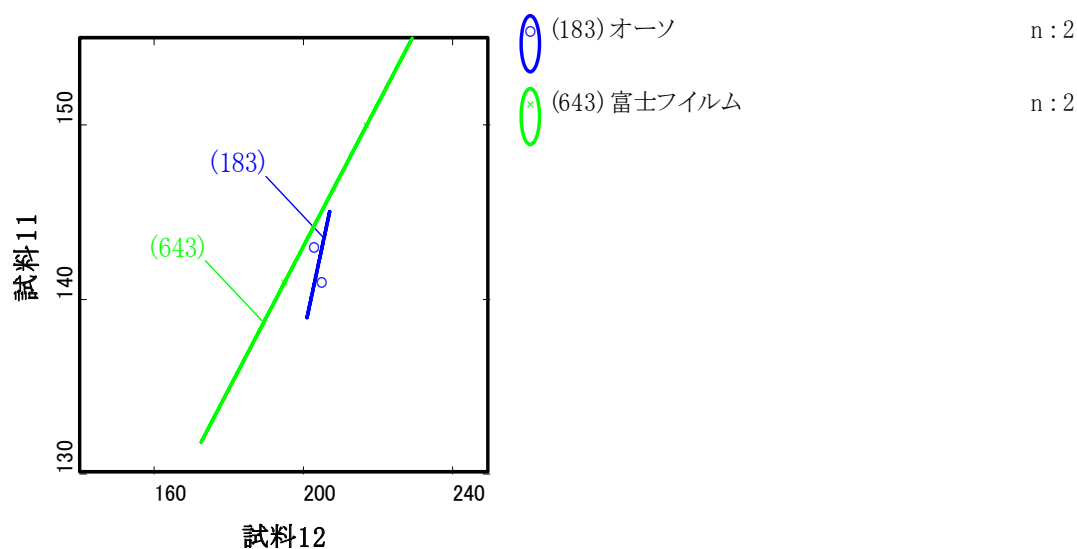


図28：総コレステロール ドライ ツインプロット図(mg/dL)

表19：総コレステロール 測定方法別集計結果

	全体				(01) COD-POD 法				(183) オーズ			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	101	148.0	2.5	1.66	101	148.0	2.5	1.66	2	142.0	1.4	1.00
試料 12	99	206.5	3.3	1.60	99	206.5	3.3	1.60	2	204.0	1.4	0.69
(643) 富士フイルム												
	n	mean	SD	CV(%)								
試料 11	2	145.5	6.4	4.37								
試料 12	2	206.0	15.6	7.55								

14. 中性脂肪

検量方法について、多数の施設がJSCC/ReCCS基準を採用していた。現在では、国内における多くの試薬メーカーが検量用標準物質に対し、JSCC/ReCCS基準

やNIST基準と複数の標準物質から値付けを行っている。

ウェット法における中性脂肪の全施設CV(%)は1.9~2.0%であり、非常に良好な結果であった(図29・図30・表20)。

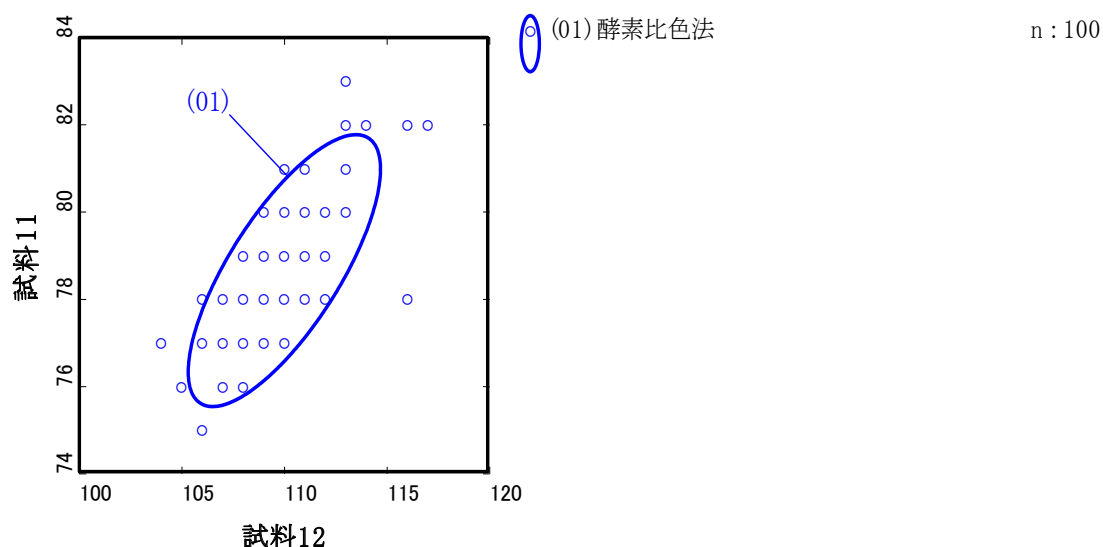


図29：中性脂肪 ウェット ツインプロット図(mg/dL)

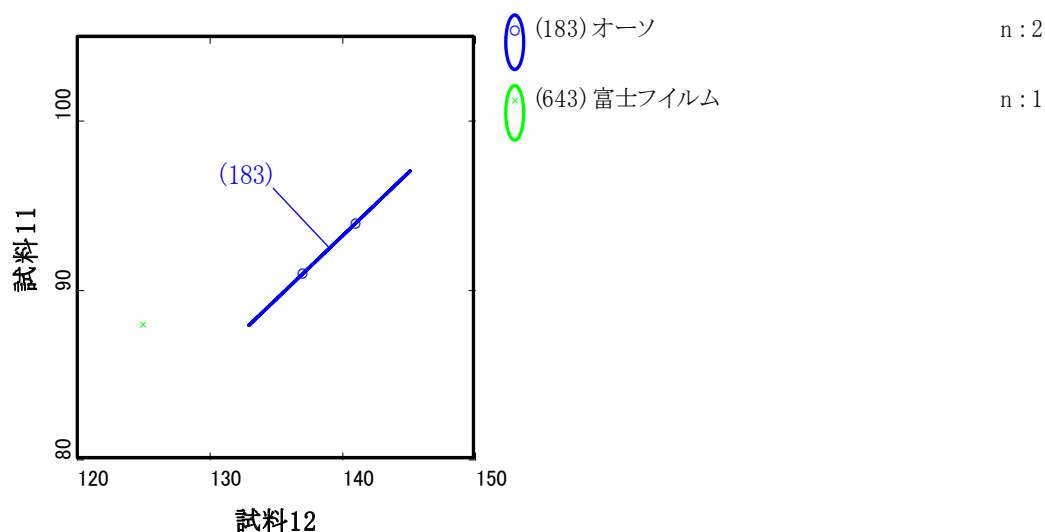


図30：中性脂肪 ドライ ツインプロット図(mg/dL)

表20：中性脂肪 測定方法別集計結果

	全体				(001)酵素比色法				(183)オーズ			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	101	78.7	1.5	1.88	101	78.7	1.5	1.88	2	92.5	2.1	2.29
試料 12	100	110.0	2.2	1.98	100	110.0	2.2	1.98	2	139.0	2.8	2.03
(643)富士フイルム												
	n	mean	SD	CV(%)								
試料 11	1	88.0	-	-								
試料 12	1	125.0	-	-								

15. HDL-コレステロール

HDL-コレステロールは測定方法間差が認められる項目である。この要因として、測定原理に因るものや、試料が新鮮血清でない場合に起こる質的变化等が考えられる。全施設CV(%)は3.6~4.6%であり、例年とほぼ同等の結果であった。

脂質項目はキャリブレーション時に、リポタンパクの

再形成が行われるため、溶解してから使用できるまでに時間を要する。また溶解後、他項目と比較し長期間保存が可能のため、キャリブレーションの溶解手技や、保存条件がデータに及ぼす影響も懸念される。キャリブレーションは測定値を決定するための重要な過程であるため、キャリブレーションの使用法には注意していただきたい(図31・図32・表21)。

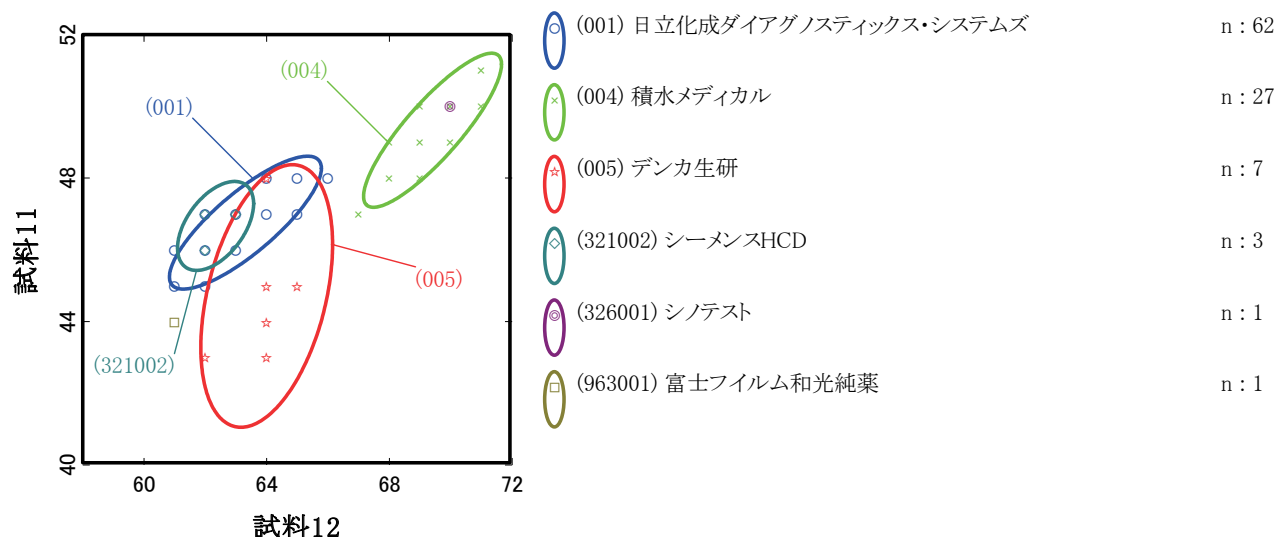


図31：HDL-コレステロール ウェット ツインプロット図(mg/dL)

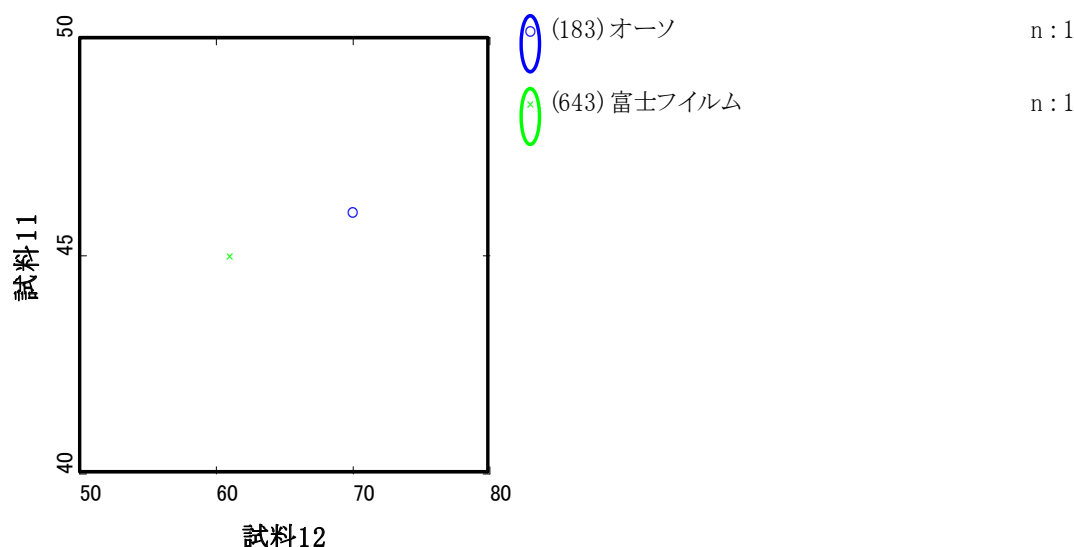


図32：HDL-コレステロール ドライ ツインプロット図(mg/dL)

表21：HDL-コレステロール 測定方法別集計結果

全体					(001) 日立化成ダイアグノスティックス・システムズ				(321002) シーメンス HCD			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	101	47.3	1.7	3.57	62	46.8	0.9	1.84	3	46.7	0.6	1.24
試料 12	101	65.0	3.0	4.58	62	63.3	1.2	1.82	3	62.3	0.6	0.93
(326001) シノテスト					(004) 積水メディカル				(005) デンカ生研			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	1	50.0	-	-	27	49.3	1.0	2.03	7	44.7	1.7	3.81
試料 12	1	70.0	-	-	27	69.4	1.0	1.51	7	64.0	1.0	1.56
(963001) 富士フイルム和光純薬					(183) オーズ				(643) 富士フイルム			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	1	44.0	-	-	1	46.0	-	-	1	45.0	-	-
試料 12	1	61.0	-	-	1	70.0	-	-	1	61.0	-	-

16. LDL-コレステロール

LDL-コレステロールもHDL-コレステロール同様、測定方法間差が認められる項目である。全施設CV(%)は4.0～5.0%であり、昨年よりやや大きい結果であった。積水メディカルは27施設で採用されておりCV(%)は1.8%であった。日立化成ダイアグノスティックス・システムズは61施設で採用されておりCV(%)は1.6～1.7%であった(図33・表22)。

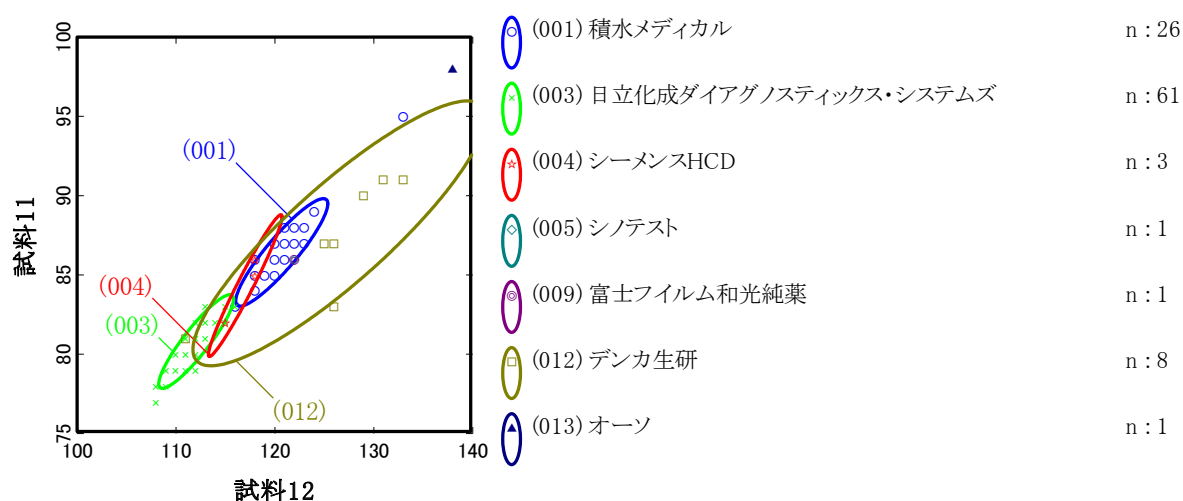


図33：LDL-コレステロール ウェット ツインプロット図(mg/dL)

表22：LDL-コレステロール 測定方法別集計結果

全体					(013)オーン				(003)日立化成ダイアグノスティックス・システムズ			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	100	83.0	3.3	3.99	1	98.0	-	-	61	80.8	1.4	1.70
試料 12	101	116.0	5.8	5.04	1	138.0	-	-	61	112.0	1.8	1.57
(004)シーメンス HCD					(005)シノテスト				(001)積水メディカル			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	3	84.3	2.1	2.47	1	86.0	-	-	26	86.4	1.6	1.83
試料 12	3	117.0	1.7	1.48	1	122.0	-	-	26	120.7	2.2	1.80
(012)デンカ生研					(009)富士フイルム和光純薬							
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)				
試料 11	8	87.6	3.9	4.44	1	86.0	-	-				
試料 12	8	126.5	6.9	5.44	1	122.0	-	-				

17. 酵素

酵素項目はJSCC標準化対応法の普及率が92～100%であった。 γ -GTは、JSCC標準化対応法以外の方法を選択している施設が3施設認められた。その他の項目でも未回答やその他の方法が0～8%見られたため、再度自施

設の方法を確認していただきたい。

AST、ALTにおけるJSCC標準化対応法採用施設のCV(%)は、それぞれ1.2～2.2%、1.4～2.2%であり、例年とほぼ同様の結果が得られた(図34・図35・表23・図36・図37・表24)。

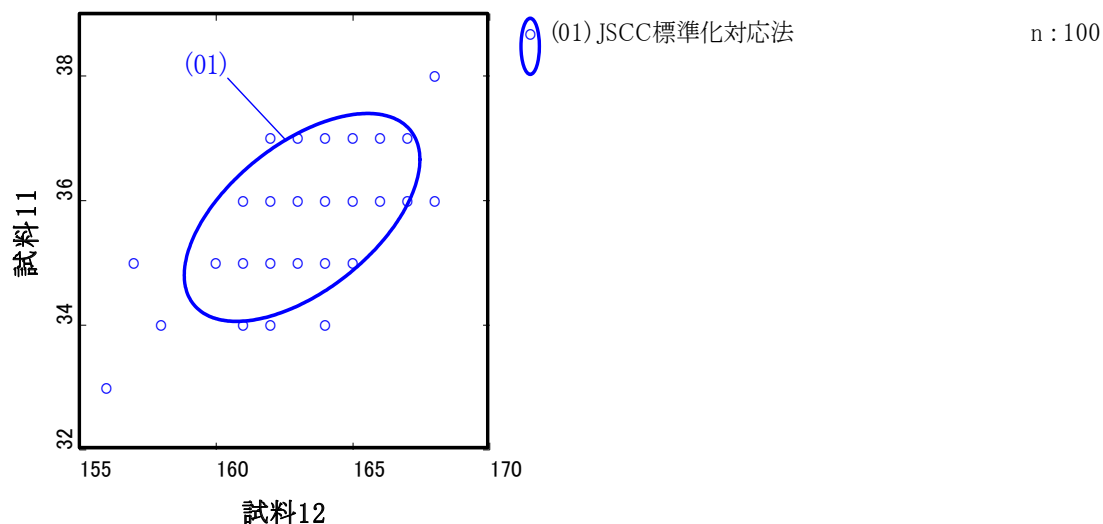


図34：AST ウェット ツインプロット図(U/L)

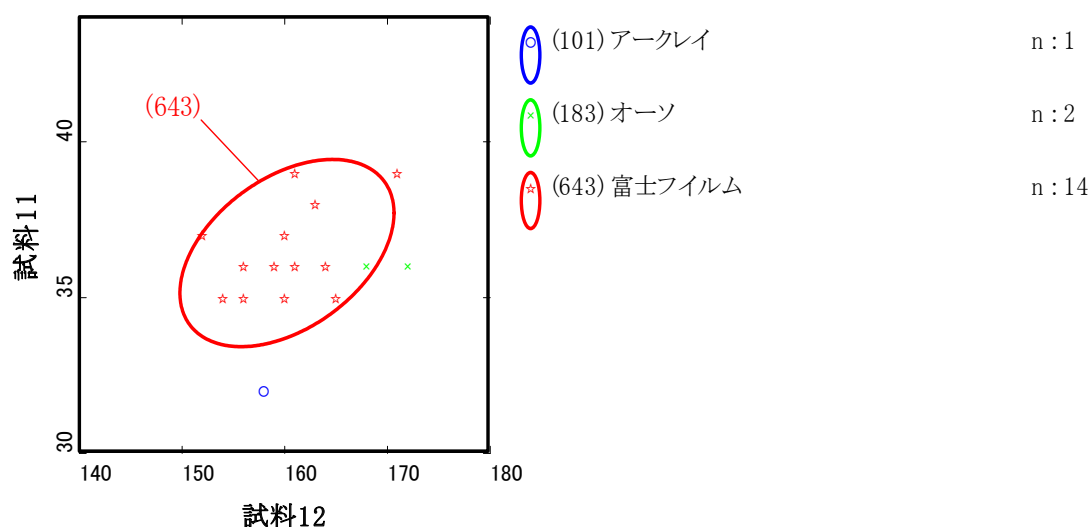


図34：AST ドライ ツインプロット図(U/L)

表23：AST 測定方法別集計結果

全体					(01)JSCC 標準化対応法				(101)アークレイ			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	Mean	SD	CV(%)
試料 11	102	35.7	0.8	2.23	102	35.7	0.8	2.23	1	32.0	-	-
試料 12	102	163.1	2.1	1.26	100	163.1	2.0	1.23	1	158.0	-	-
(183)オース					(643)富士フイルム							
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)				
試料 11	2	36.0	0.0	0.00	14	36.4	1.4	3.84				
試料 12	2	170.0	2.8	1.66	14	160.2	4.9	3.03				

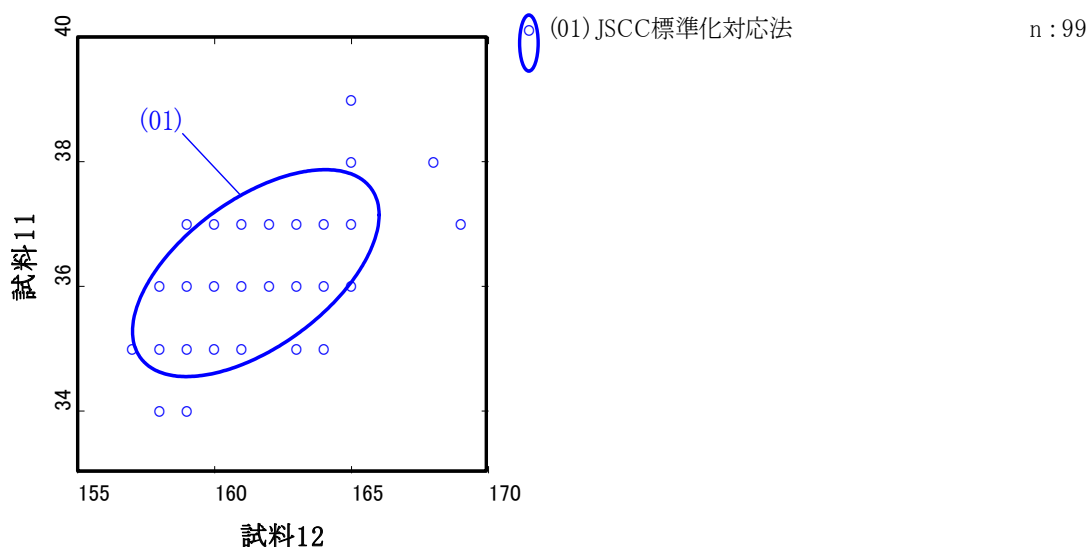


図36: ALT ウェット ツインプロット図(U/L)

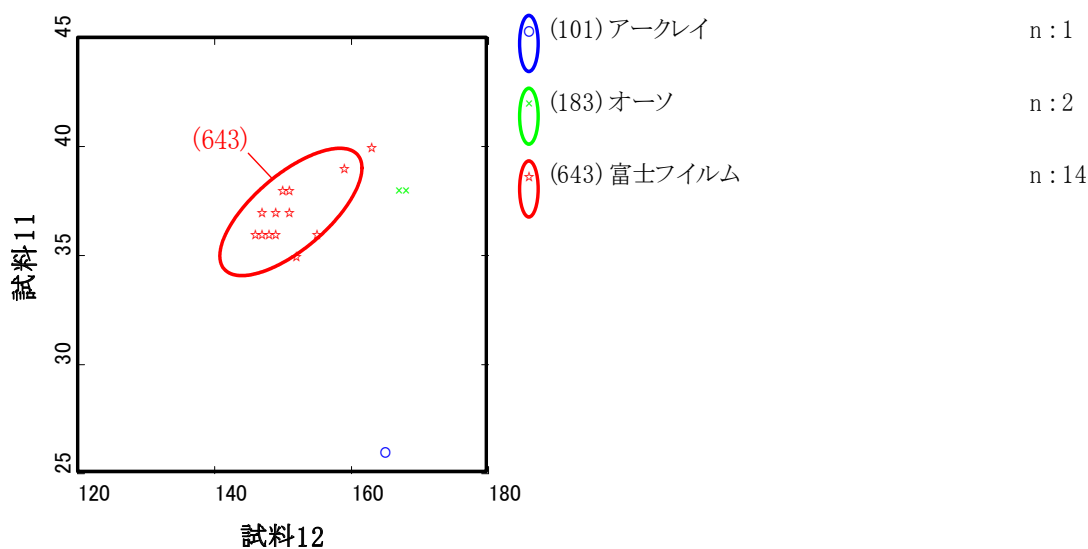


図37: ALT ドライ ツインプロット図(U/L)

表24: ALT 測定方法別集計結果

全体					(01)JSCC 標準化対応法				(101)アークレイ			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	103	36.2	0.8	2.27	102	36.2	0.8	2.22	1	26.0	-	-
試料 12	101	161.5	2.2	1.35	101	161.5	2.2	1.35	1	165.0	-	-
(183)オーソ					(643)富士フイルム							
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)				
試料 11	2	38.0	0.0	0.00	14	37.0	1.4	3.67				
試料 12	2	167.5	0.7	0.42	14	151.1	4.8	3.20				

ALPは例年、系統誤差が認められており、今年度も同様に認められた。系統誤差の要因としては、試薬ボトル開封後の放置による緩衝液のpH変化や酵素キャリブ

レータ溶解時の水の温度、測定までの時間などが考えられる。全施設CV（％）は2.1％と良好な結果であった（図38・図39・表25）。

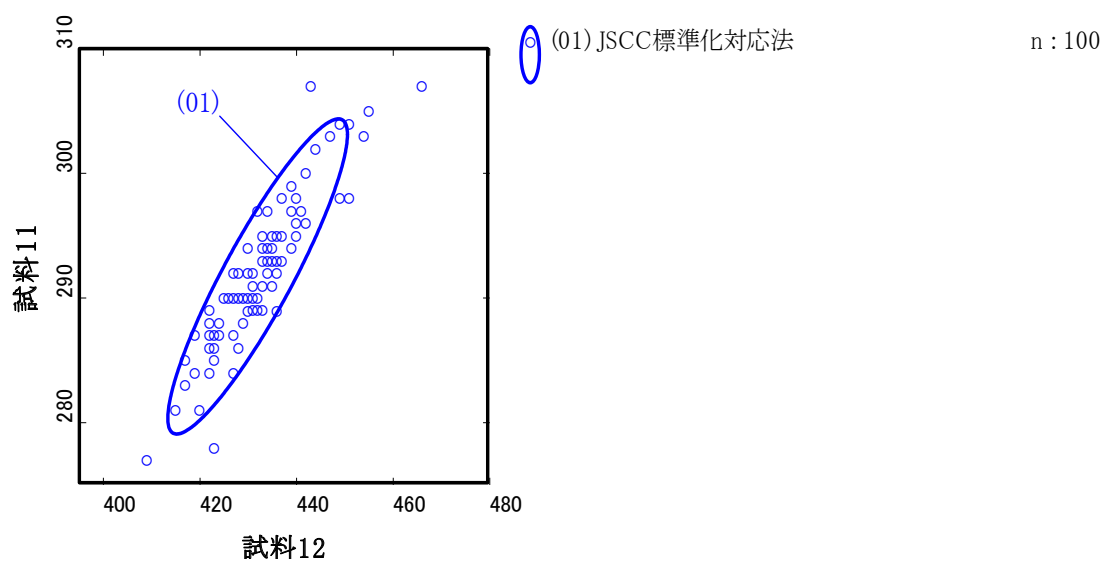


図38：ALP ウェット ツインプロット図(U/L)

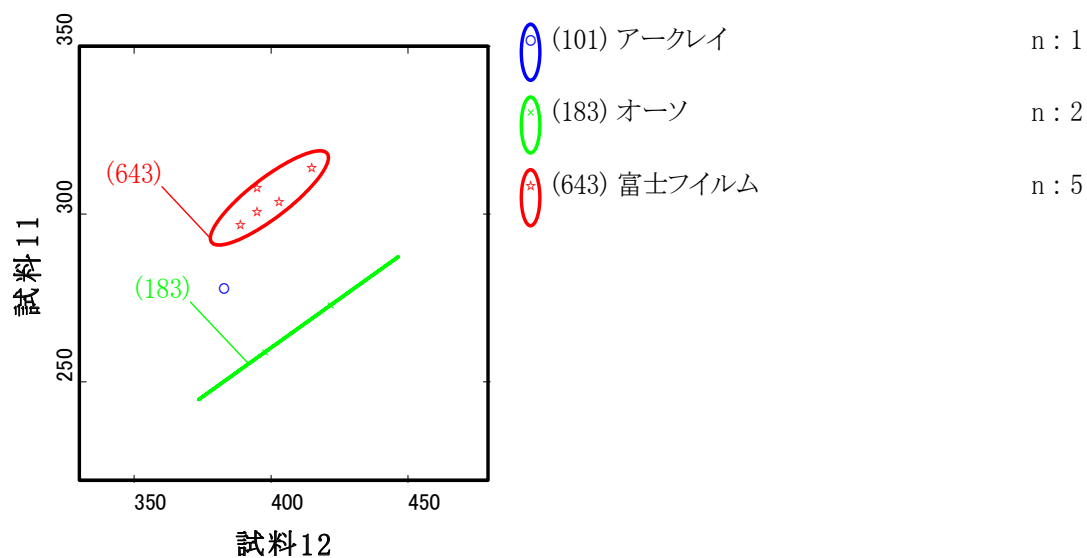


図39：ALP ドライ ツインプロット図(U/L)

表25：ALP 測定方法別集計結果

全体					(01)JSCC 標準化対応法				(101)アークレイ			
	n	mean	SD	CV(%)	N	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	101	291.9	6.1	2.07	101	291.9	6.1	2.07	1	278.0	—	—
試料 12	101	431.7	9.0	2.08	101	431.7	9.0	2.08	1	383.0	—	—
(183) オーソ					(643) 富士フイルム							
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)				
試料 11	2	366.0	9.9	3.72	5	304.8	6.5	2.14				
試料 12	2	410.0	17.0	4.14	5	399.4	10.0	2.51				

CKはCV（％）が1.6%とよく収束しており、良好な結果が得られた。CKは酵素キャリブレーション時の水の温度の影響を非常に受けやすく、温度の上昇とともに

活性値が低下することが知られているため注意が必要である（図40・図41・表26）。

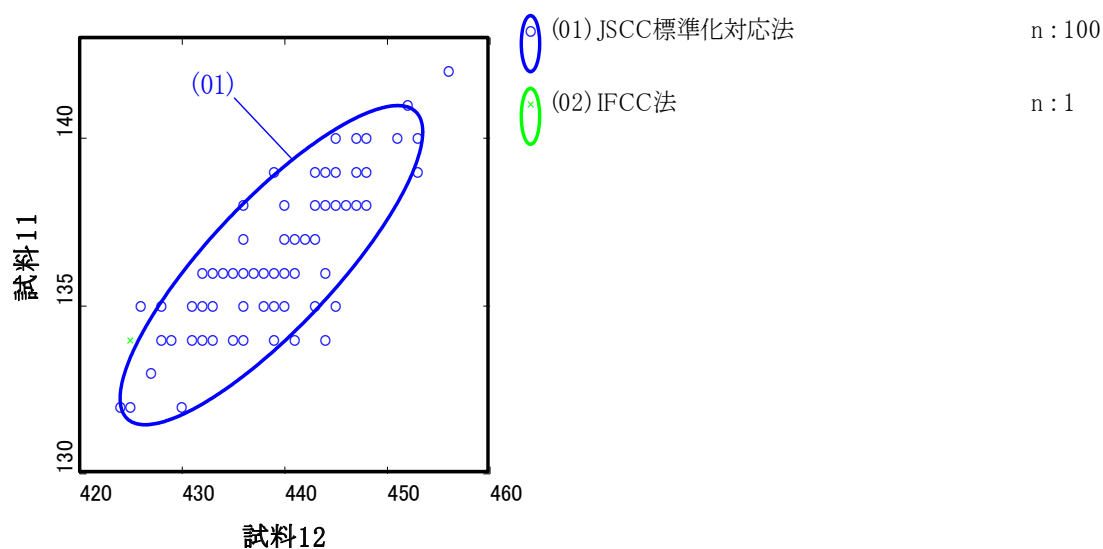


図40：CK ウェット ツインプロット図(U/L)

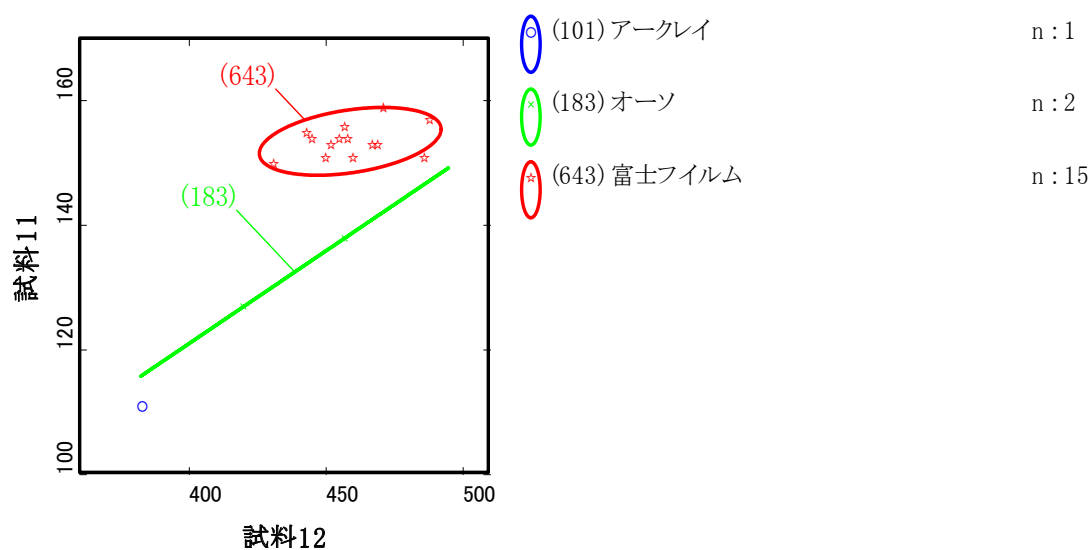


図41：CK ドライ ツインプロット図(U/L)

表26：CK 測定方法別集計結果

全体					(01) JSCC 標準化対応法				(02) IFCC 法			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	101	136.2	2.2	1.63	100	136.2	2.2	1.63	1	134.0	-	-
試料 12	103	438.8	7.2	1.63	100	438.7	6.9	1.57	1	425.0	-	-
(101) アークレイ					(183) オーソ				(643) 富士フイルム			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	1	111.0	-	-	2	132.5	7.8	5.87	15	153.5	2.5	1.65
試料 12	1	383.0	-	-	2	438.5	26.2	5.97	15	458.8	15.5	3.37

LDはよく収束している項目であり、CV（％）は1.2
～1.7％と良好な結果であった（図42・図43・表27）。

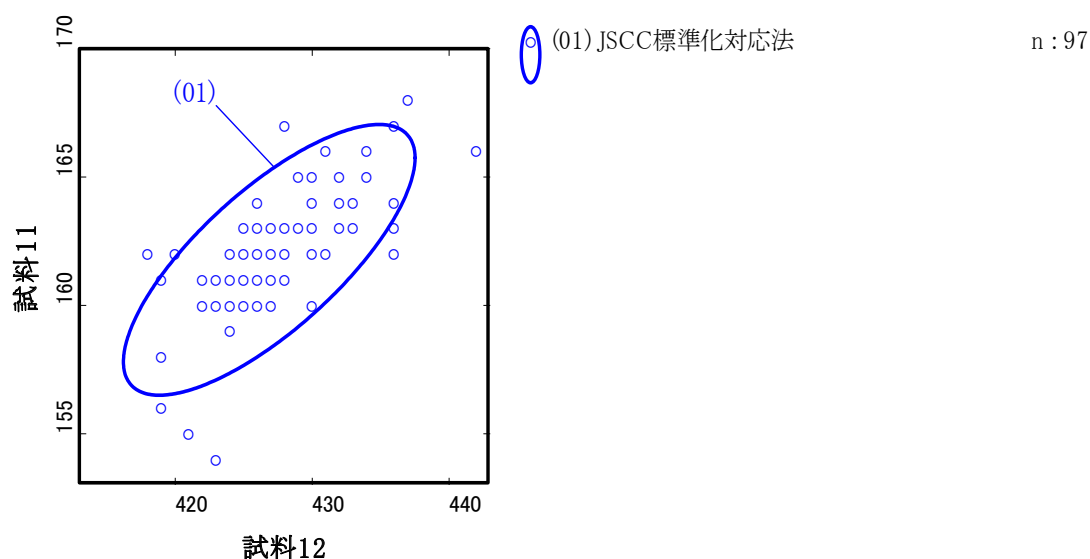


図42：LD ウェット ツインプロット図(U/L)

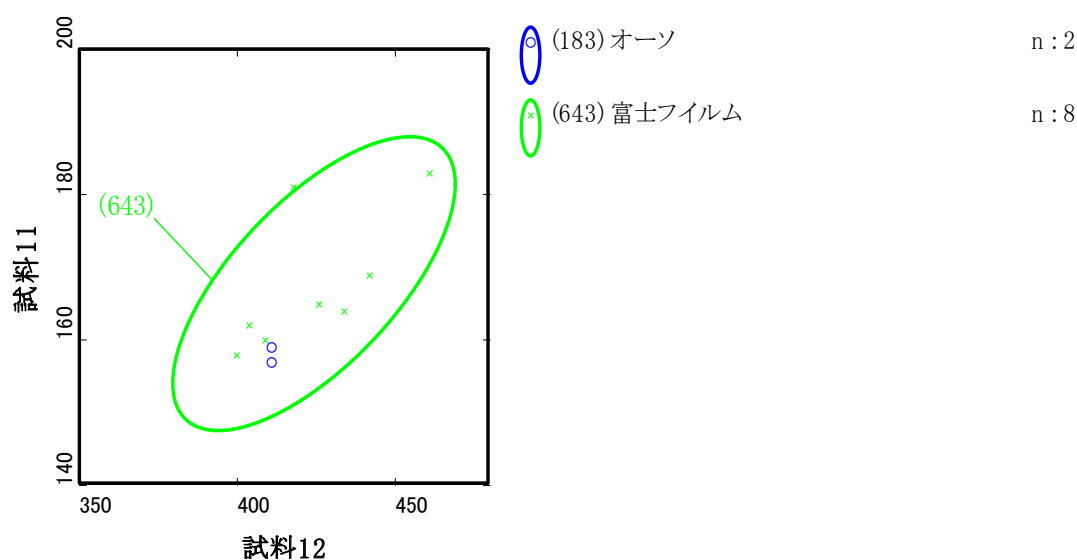


図43：LD ドライ ツインプロット図(U/L)

表27：LD 測定方法別集計結果

	全体				(01)JSCC 標準化対応法				(183)オーソ			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	100	161.9	2.7	1.65	100	161.9	2.7	1.65	2	158.0	1.4	0.90
試料 12	98	427.0	5.2	1.21	98	427.0	5.2	1.21	2	411.0	0.0	0.00
(643) 富士フイルム												
	n	mean	SD	CV(%)								
試料 11	8	167.8	9.4	5.61								
試料 12	8	424.3	20.8	4.91								

γ -GTはよく収束している項目である。CV (%) は 1.1~1.6%であり、例年同様の結果であった（図44・図45・表28）。

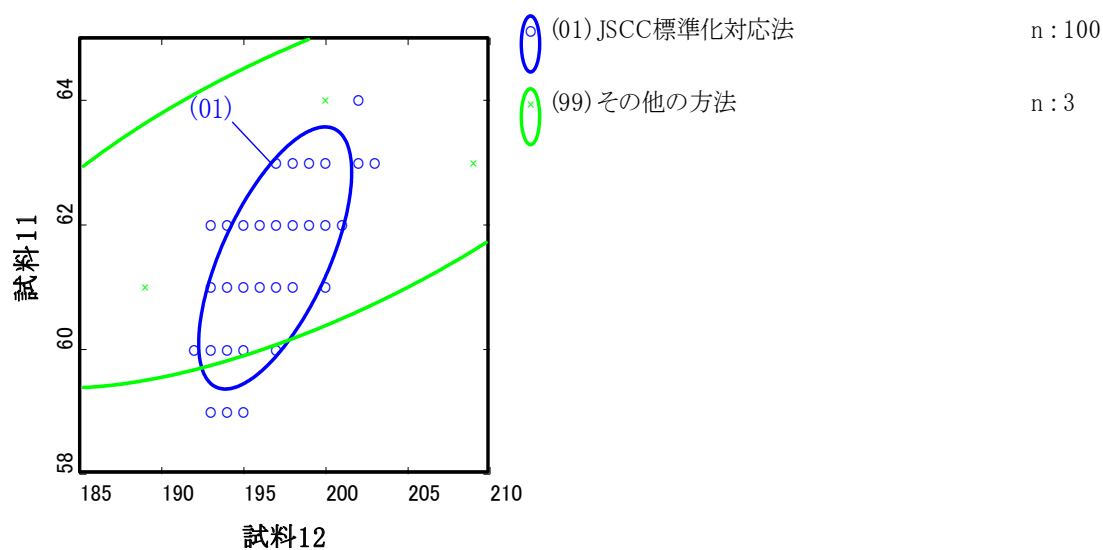


図44： γ -GT ウェット ツインプロット図(U/L)

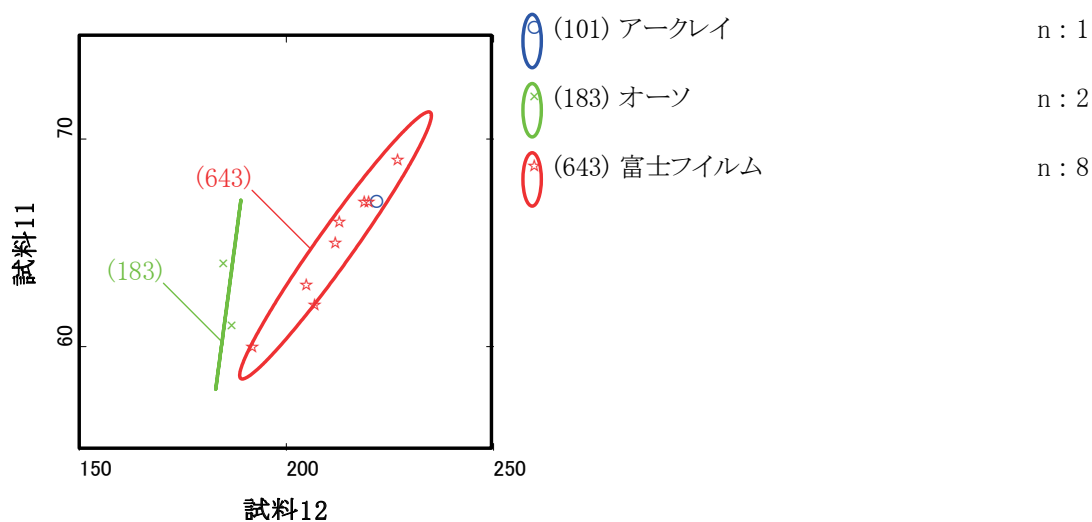


図45： γ -GT ドライ ツインプロット図(U/L)

表28： γ -GT 測定方法別集計結果

全体					(01) JSCC 標準化対応法				(99) その他の方法			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	104	61.5	1.0	1.63	101	61.5	1.0	1.59	3	62.7	1.5	2.44
試料 12	101	196.9	2.2	1.11	100	196.9	2.2	1.10	3	199.3	10.0	5.03
(101) アークレイ					(183) オーズ				(643) 富士フイルム			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	1	67.0	-	-	2	62.5	2.1	3.39	8	64.9	3.0	4.62
試料 12	1	222.0	-	-	2	186.0	1.4	0.76	8	211.9	10.8	5.09

AMYは試薬により多種の基質が存在する。現在では、トレーサビリティ体系に従いJCCLS CRMの値を伝達した酵素キャリブレーションと、JSCC標準化対応法試薬を用いれば基質間差は解消される。全施設CV (%)は1.8～1.9%とよく収束していた(図46・図47・表29)。

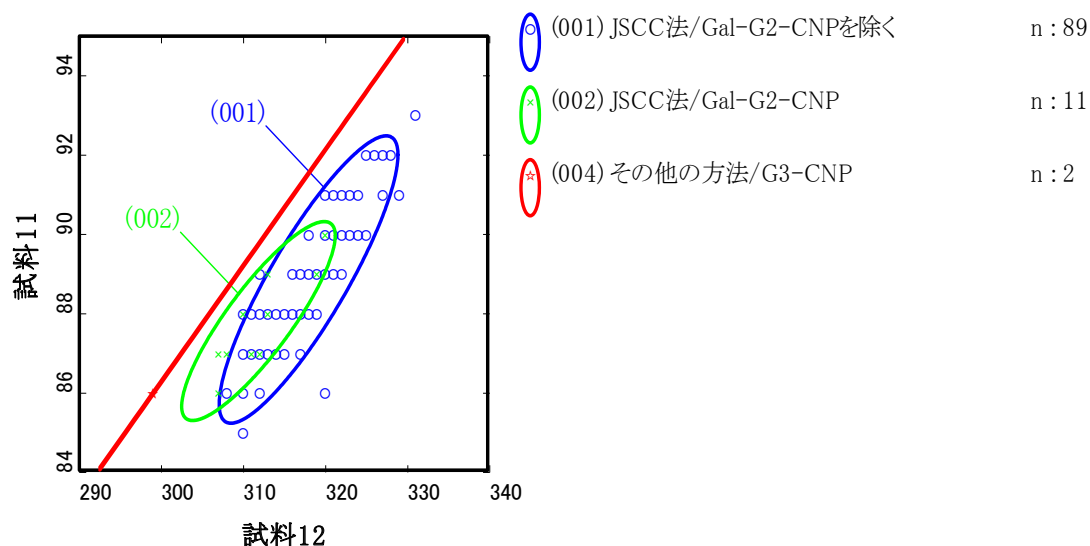


図46：AMY ウェット ツインプロット図(U/L)

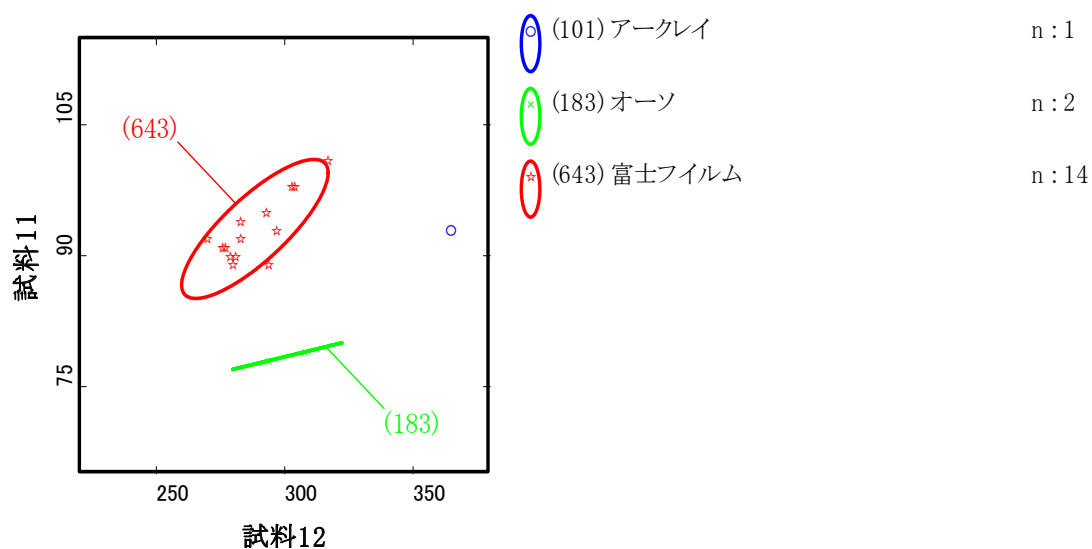


図47：AMY ドライ ツインプロット図(U/L)

表29：AMY 測定方法別集計結果

全体					(001)JSCC 法/Gal-G2-CNP を除く				(002)JSCC 法/Gal-G2-CNP			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	N	mean	SD	CV(%)
試料 11	102	88.7	1.7	1.91	89	88.9	1.7	1.90	11	87.8	1.2	1.33
試料 12	101	317.1	5.6	1.77	89	317.9	5.1	1.59	11	311.8	4.4	1.40
(004)その他の方法/G3-CNP					(101)アークレイ				(183)オーソ			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	2	80.0	8.5	10.61	1	93.0	-	-	2	78.5	0.7	0.90
試料 12	2	278.5	29.0	10.41	1	365.0	-	-	2	301.0	9.9	3.29
(643)富士フイルム												
	n	mean	SD	CV(%)								
試料 11	14	93.1	3.7	3.99								
試料 12	14	288.4	13.3	4.61								

ChEは多様な基質が存在するが、今年度も昨年度と同様に非常に収束していた。全施設CV(%)は1.2～1.3%であった(図48・図49・表30)。

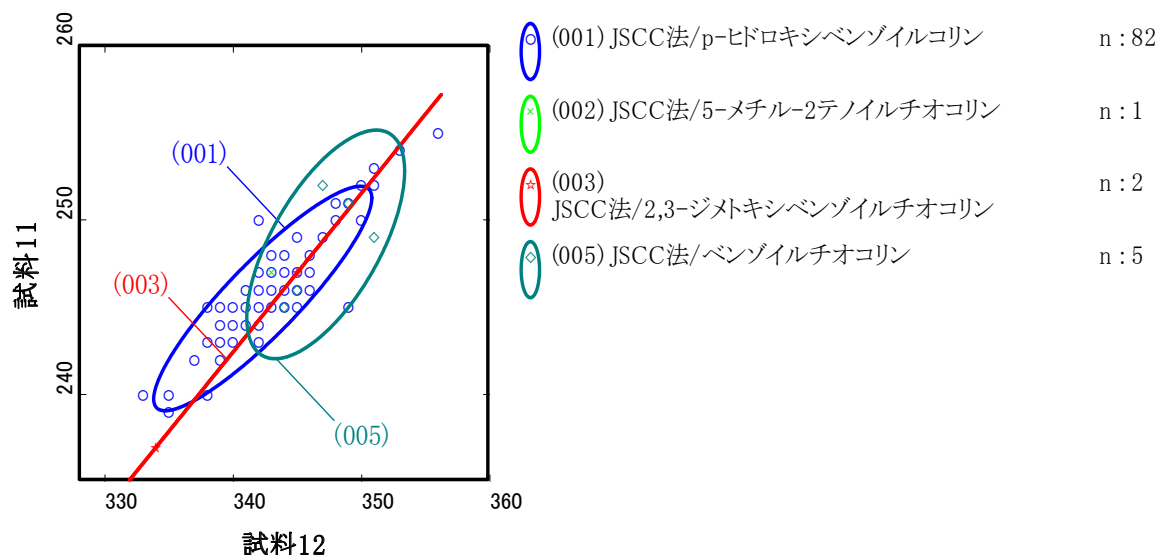


図48：ChE ウェット ツインプロット図(U/L)

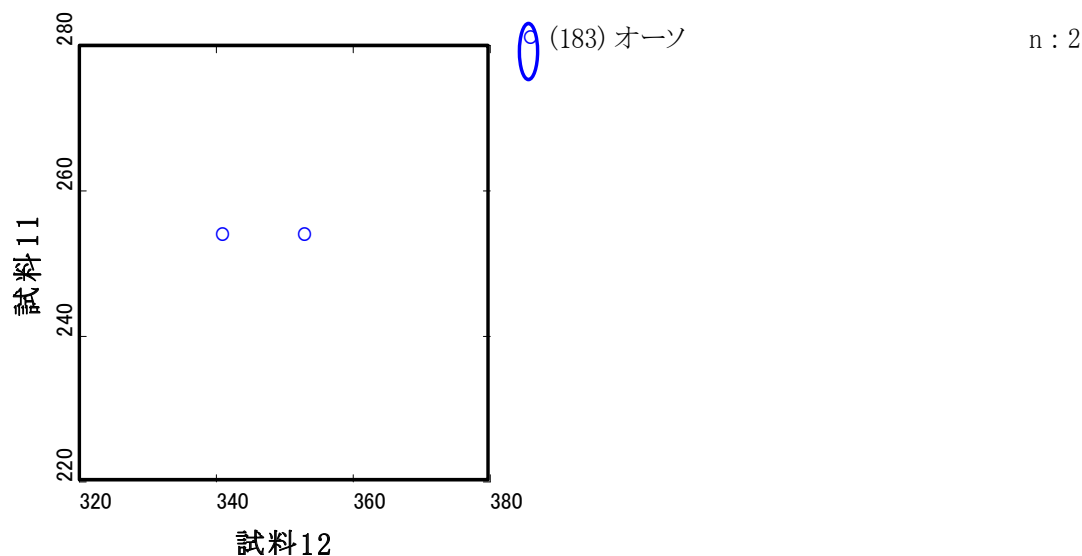


図49：ChE ドライ ツインプロット図(U/L)

表30：ChE 測定方法別集計結果

全体					(001)JSCC 法/ p-ヒドロキシベンゾイルコリン				(002)JSCC 法/ 5-メチル-2 テノイルチオコリン			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	N	mean	SD	CV(%)
試料 11	91	245.7	3.3	1.34	83	245.6	3.2	1.28	1	247.0	-	-
試料 12	90	342.5	4.1	1.20	82	342.3	4.0	1.16	1	343.0	-	-
(003)JSCC 法/ 2,3-ジメトキシベンゾイルチオコリン					(005)JSCC 法/ ベンゾイルチオコリン				(183)オーツ			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	2	242.0	7.1	2.92	5	248.6	3.0	1.23	2	254.0	0.0	0.00
試料 12	2	339.5	7.8	2.29	5	347.2	2.9	0.82	2	347.0	8.5	2.45

18. CRP

ウェット法における測定方法別採用頻度は、ラテックス比濁法が108施設（99%）、その他の方法1施設（1%）であった。CRPの全施設CV（%）は高濃度域で

3.1%、低濃度域で4.8%であったが、低濃度域におけるウェット法施設の測定値は0.34mg/dL～0.47mg/dLと良好であった（図50・図51・表31）。

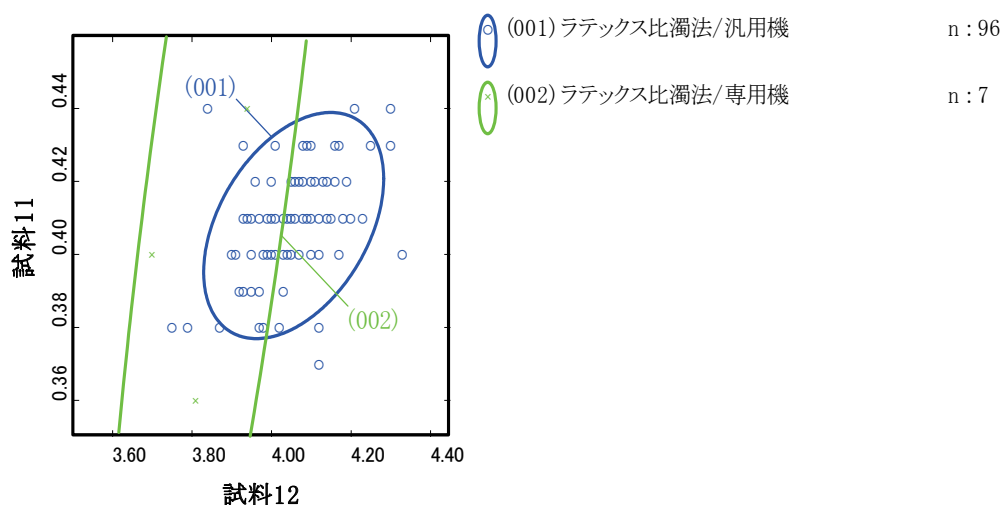


図50：CRP ウェット ツインプロット図(mg/dL)

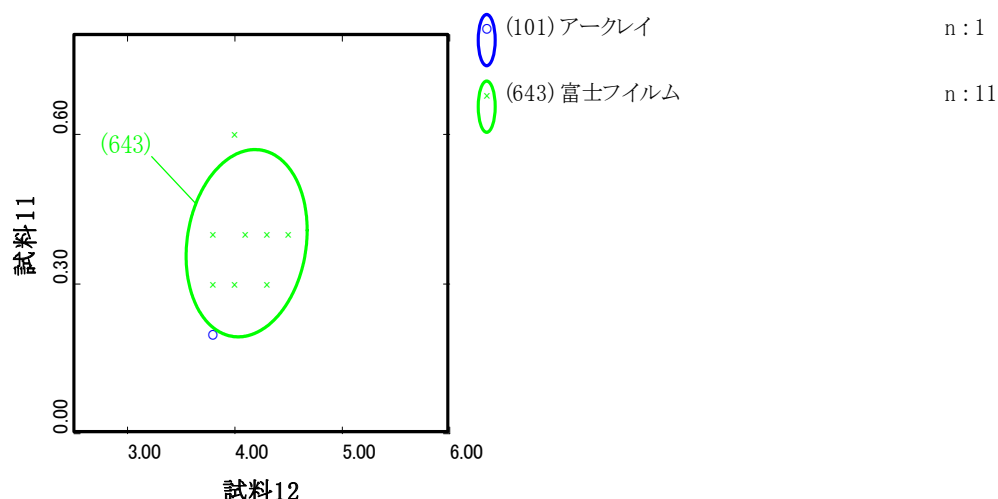


図51：CRP ドライ ツインプロット図(mg/dL)

表31：CRP 測定方法別集計結果

全体					(001)ラテックス比濁法/汎用機				(002)ラテックス比濁法/専用機			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 11	104	0.407	0.020	4.84	96	0.408	0.014	3.54	7	0.427	0.095	22.24
試料 12	108	4.048	0.123	3.05	100	3.873	0.141	3.64	7	3.873	0.141	3.64
(101)アークレイ					(643)富士フイルム							
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)				
試料 11	1	0.200	—	—	11	0.382	0.087	22.89				
試料 12	1	3.800	—	—	11	4.109	0.263	6.39				

19. ヘモグロビンA1c

今年度は試料13・14で方法間差が認められたため、方法別に評価を行った。測定方法別採用頻度はHPLC法が79施設（73%）、免疫比濁法が12施設（11%）、酵素法が17施設（16%）であった。HPLC法のうち、アークレイが40施設、東ソーが39施設であった。ヘモグロビンA1cの全施設CV（%）は2.6～2.8%であった（図52・表32）。

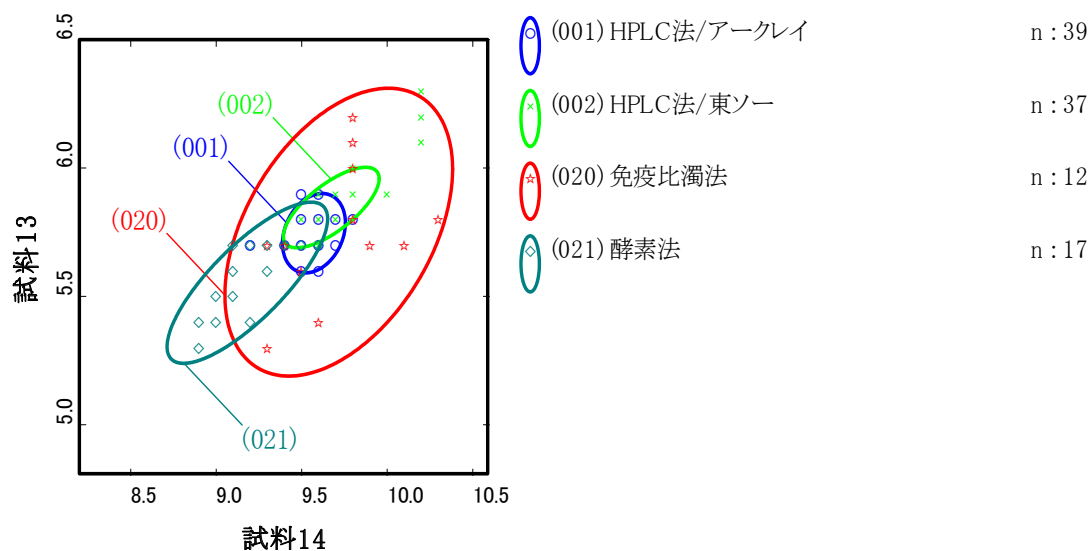


図52：ヘモグロビンA1c ツインプロット図(%)

表32：ヘモグロビンA1c 測定方法別集計結果

全体					(01)HPLC 法/アークレイ				(02)HPLC 法/東ソー			
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)
試料 13	107	5.75	0.16	2.77	40	5.75	0.07	1.24	37	5.85	0.07	1.25
試料 14	108	9.57	0.25	2.64	39	9.57	0.09	0.90	39	9.70	0.17	1.79
(020)免疫比濁法					(021)酵素法							
	n	mean	SD	CV(%)	n	mean	SD	CV(%)				
試料 13	12	5.75	0.26	4.54	17	5.55	0.15	2.63				
試料 14	12	9.72	0.31	3.19	17	9.18	0.22	2.38				

20. 基準範囲

表33には今年度の基準範囲の採用率を項目別に示す。昨年度のJCCLS共用基準範囲の採用率は16～22%であったが、今年度のJCCLS共用基準範囲の採用率は22～28%と増加していた。AiCCLS統一化基準値の採用率

が減少しており、AiCCLS統一化基準値からJCCLS共用基準範囲への切り替えが行われたと考えられる。今後もJCCLS共用基準範囲を推進していくとともに、JCCLS共用基準範囲の採用率の推移を注意深く見守っていきたい（表33）。

表33：項目別基準値採用率

項目	AiCCLS 統一化基準値	JCCLS 共用基準範囲	その他の基準範囲	未回答
Glu	37%	22%	24%	17%
TB	37%	24%	24%	15%
Na	36%	24%	25%	15%
K	36%	24%	25%	15%
Cl	36%	24%	25%	15%
Ca	40%	23%	24%	13%
IP	44%	27%	21%	8%
Fe	32%	28%	34%	6%
TP	39%	23%	23%	15%
ALB	40%	25%	25%	10%
UN	38%	24%	24%	14%
Cre	37%	24%	25%	14%
UA	40%	24%	27%	9%
TC	38%	24%	29%	9%
TG	38%	24%	29%	9%
HDLC	38%	24%	29%	9%
LDLC	29%	24%	37%	10%
AST	37%	24%	24%	15%
ALT	37%	24%	24%	15%
ALP	41%	25%	25%	9%
CK	37%	25%	23%	15%
LD	42%	25%	25%	8%
GGT	40%	25%	25%	10%
AMY	40%	23%	22%	15%
ChE	42%	27%	22%	9%
CRP	35%	23%	25%	17%
HbA1c	20%	22%	48%	10%

21. トレーサビリティの確認

日常検査に用いる試薬やキャリブレーションは、標準化の測定体系に基づいたものを選択し、正しい組み合わせで使用する必要がある。これらを正しく用いることにより正確な測定値を報告することが可能となるが、そこには実際の検査室における測定誤差や測定機種等の条件は加味されていない。したがって、実際の測定値がどの程度の誤差を持っているのかを各検査室で確認する必要がある。確認方法として以下の2法がある。①検量物質のさ

らに上位の標準物質を用いて認証値との整合性を確認する。②日常検査においてメーカー指定の検量物質によるキャリブレーションを実施している場合、この検量物質を検体として測定することでトレーサビリティを確認する。トレーサビリティの確認は毎日実施する必要はないが、定期的な計画に基づき行っていただきたい。

多くの施設が企業の標準品を用いてトレーサビリティの確認を実施していたが、3～10%の施設が未実施であった（表34）。

表34：トレーサビリティの確認

	1)NIST	2)ReCCS	4)IRMM	7)CERI	8)企業	9)その他	0)実施していない
Glu	4%	6%	0%	0%	83%	1%	6%
Na	2%	9%	0%	0%	78%	1%	10%
K	2%	10%	0%	0%	77%	1%	10%
Cl	2%	10%	0%	0%	77%	1%	10%
Ca	3%	8%	0%	0%	81%	2%	6%
IP	3%	6%	0%	0%	84%	1%	6%
Fe	2%	6%	0%	0%	84%	2%	6%
Mg	3%	10%	0%	2%	74%	2%	9%
ALB	0%	0%	8%	0%	84%	1%	7%
UN	6%	5%	0%	0%	82%	0%	7%
Cre	4%	5%	0%	0%	84%	0%	7%
UA	4%	5%	0%	0%	85%	0%	6%
TC	5%	5%	0%	0%	83%	0%	7%
TG	2%	8%	0%	0%	84%	1%	5%
HDL	0%	9%	0%	0%	85%	1%	5%
LDL	0%	9%	0%	0%	84%	1%	6%
AST	0%	13%	0%	0%	83%	0%	4%
ALT	0%	13%	0%	0%	82%	0%	5%
ALP	0%	13%	0%	0%	84%	0%	3%
CK	0%	13%	0%	0%	83%	0%	4%
LD	0%	13%	0%	0%	84%	0%	3%
GGT	0%	13%	0%	0%	81%	2%	4%
AMY	0%	14%	0%	0%	80%	2%	4%
ChE	0%	10%	0%	0%	87%	0%	3%
CRP	0%	0%	8%	0%	83%	1%	8%

22. ドライケミストリー法の評価

測定試料としてプール血清を使用しており、凍結乾燥試料特有のマトリクス効果の影響を考慮する必要がないため、ドライケミストリー法の目標値はウェット法の目標値を採用した。また、今年度よりドライケミストリー法の評価幅の変更を行った。

ドライケミストリー法の精度は向上しているものの、項目によっては測定原理の違いや標準化対応試薬などが整備されていないことなどが原因で、ウェット法との乖離が生じていると考えられる。また、測定値と同時に係数の入力も求めたが、係数が誤差の要因になっていることも考えられるため、正しく設定されているか今一度検討して頂きたい。

VII. まとめ

本年度の評価幅について、昨年度と同様にA評価は臨床化学会が提唱する B_A 、B・C・D評価は技術水準を考慮して評価を行った。

表35には各項目における評価割合を示した。試料11・12および試料13・14において、B評価以上の施設が90%を超えていた（表35）。

愛知県臨床検査技師会では、データ共有化事業として各地区に基幹施設を設置し、地区内施設のデータ共有化をサポートする体制を構築している。県内の基幹施設は、日臨技が展開する標準化事業により他県の基幹施設と測定値の整合性が確認されているため、基幹施設と自施設が測定値を一致させることで国内データの標準化が達成されるものと思われる。すなわち、外部精度管理調査に積極的に参加して自施設のデータを他施設と比較を行い、国内の標準化されたデータ群との整合性を確認していただきたい。試薬と標準物質および測定機器を正しく使用していれば、“A”または“B”評価が得られる設定を行っているため、“C”または“D”評価を受けた施設は、県内各地区の基幹施設や研究班班員を大いに活用していただき、前向きなデータ改善に努めていただきたい。

最後に、ご多忙のなか、本調査にご参加頂いた施設と関係各位の皆様に深謝致します。

VIII. 実務担当者

- 林 克彦（JA愛知厚生連 江南厚生病院）
- 生物化学分析検査研究班班員

IX. 参考文献

1. 臨床検査精度管理調査の定量検査評価法と試料に関する日臨技指針 社団法人日本臨床検査技師会 精度管理調査評価法検討・試料検討ワーキンググループ
2. 生理的変動に基づいた臨床化学検査36項目における測定の許容誤差限界 日本臨床化学クオリティマネジメント専門委員会 臨床化学35：144-153, 2006
3. 愛知県臨床検査統一化ガイドライン「臨床化学検査24項目」 愛知県臨床検査標準化協議会

表35：評価割合

	試料 11/試料 13				試料 12/試料 14			
	A+B	C	D	※	A+B	C	D	※
Glu	96%	2%	2%	0%	99%	1%	0%	0%
TB	97%	0%	0%	3%	92%	4%	1%	3%
Na	97%	2%	1%	0%	98%	0%	2%	0%
K	99%	1%	0%	0%	96%	3%	1%	0%
Cl	98%	1%	1%	0%	100%	0%	0%	0%
Ca	100%	0%	0%	0%	99%	1%	0%	0%
IP	100%	0%	0%	0%	100%	0%	0%	0%
Fe	99%	1%	0%	0%	99%	0%	1%	0%
Mg	98%	2%	0%	0%	95%	3%	2%	0%
TP	100%	0%	0%	0%	100%	0%	0%	0%
ALB	100%	0%	0%	0%	100%	0%	0%	0%
UN	97%	1%	2%	0%	97%	2%	1%	0%
Cre	98%	2%	0%	0%	99%	1%	0%	0%
UA	98%	2%	0%	0%	100%	0%	0%	0%
TC	100%	0%	0%	0%	99%	1%	0%	0%
TG	99%	1%	0%	0%	98%	1%	1%	0%
HDLc	94%	1%	0%	5%	95%	0%	0%	5%
LDLC	92%	1%	1%	6%	92%	0%	2%	6%
AST	100%	0%	0%	0%	99%	1%	0%	0%
ALT	99%	1%	0%	0%	98%	1%	1%	0%
ALP	100%	0%	0%	0%	97%	2%	1%	0%
CK	97%	1%	2%	0%	99%	1%	0%	0%
LD	98%	2%	0%	0%	99%	1%	0%	0%
GGT	100%	0%	0%	0%	100%	0%	0%	0%
AMY	98%	0%	2%	0%	98%	0%	2%	0%
ChE	100%	0%	0%	0%	100%	0%	0%	0%
CRP	99%	0%	1%	0%	97%	2%	1%	0%
HbA1c	96%	4%	0%	0%	97%	3%	0%	0%

※評価対象外